

---

# ASASHIN

真鵬 澄也

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ASAHI

### 【Zコード】

Z4484D

### 【作者名】

真鵬 澄也

### 【あらすじ】

江藤裕希は高校入学と同時に探偵部へ入部する。裕希には2つの顔がある。女子高生とアサシンという顔。暗闇の中で生きてきた彼女。探偵部の人達と過ごすうちに芽生えた想い。その想いに葛藤しながらも受け入れようとしていたときに知った父親の死の原因。その時彼女は…

## ～はじめ～（前書き）

小説の中には「死」「血」「怪我」等、軽くではありますまいが出てきます。  
苦手な方は「注意してください。」

## ～はじめ～

もう四月だとこりの二、今日の寒さはいつたにビリしたものだらう。

今にも雪が降つてきそうな空。

私、江藤 裕希、十六歳。

やつと中学を卒業して今田から高校一年生だ。  
前の晩、一通の手紙が届いた。父からだつた。

『親愛なる娘、裕希へ。

高校入学おめでとう。すまないが今年もどうやら帰れそうにありません。おまえにはいつも寂しい思いをさせてすまない。私も早くおまえに会いたい。なるべく早く帰れるようにします。くれぐれも体に気をつけて、高校生になつたからといってあまり夜遊びをするんじやないぞ。

父より』

一という内容だつた。

私の父は一等航海士で船長をしています。だから一年のほとんどが海の上です。家に帰つてくることは早々はありません。でも、こうやって月に一度手紙を送つてくれます。寂しくないと言つたら嘘になりますけど、私としては今の状態のほうが嬉しいのです。父には悪いですけど。

実は私、学生は副業なんです。そういうと、え、じゃあ本業は何?と思いでしょ。人には決して言えないことなんです。怪しい仕事じゃないですよもちろん。このことを知つているのは一人しかいません。

ません、私専属の仲介屋だけ。

私は「カーリー」という別の名を持つ暗殺者なんですね…。高校に入つたら、絶対に入ろうとしていた部活がありました。いつたいこの部活がある高校を、どれだけ探したか…。

放課後その部活の前に行く。

コンコンッ、と、ドアを一回叩く。

すると、カチヤッとドアを明けて出てきたのは、ものすごい美人の三年生のお姉さんだった。

そのお姉さんは私を見て、

「もしかして、入部希望者?」

と、これまた奇麗な声で言った。

私はちょっと緊張して、

「ハイツ

と、応えた。

「中へどうぞ」

そういわれて中へ入つてみると、何と私のほかにもいっぱい、入部希望者の一年生がいるではないですか。

男と女、半々くらいかな。そんなに人気があるのかなあと、思つていると、

「それやあ」

そう言つて話し始めた人を見た瞬間、あたしはわかつてしまつた、みんなの入部動機が、だつてカツコイイんだもの、こここの部の人たち、女の先輩は美人だし。

この人達が目的だと、一目瞭然。

まったく、本氣で入部したいと思つてゐるあたしは、どうなるのつて感じよ。

「入部動機がどうであれ、入部テストに合格しなければ、入部することはできないからそのつもりで。ちなみに俺は、部長の宮内健悟

だ

入部テスト……ねえ。

そりやあ、まっね。すんなり入らせてくれるとは、思つてなかつたけどね。

どんなテストだろ?と思つていたら、別の先輩がしゃべつた。  
「そして俺は、副部長の斎北貢だ。テスト内容は『スクワード担当の水野聖から聞いてくれ』

クス。

この人が一番人気とみた。私の勘だけだ。

「代わりの紹介どうもありがとう。テスト内容は、知力・体力・瞬発力の三つだけです。そんなに難しいものじゃないから、地力は暗記・種類判別、体力はマラソン、女子は十キロ、男子は十五キロです。頑張ってください」

それを聞いた瞬間、希望者の一人がおどおどしながら言った。

「すいません、あたしやつぱりやめます」

そう言つて、出でていつてしまつた。

すると、ほかの子達も次々と、僕も私もといつて出でていつてしまつた。

気が付くと、私だけになつていた。

部屋の中は静まり返つている。

沈黙を破つたのは、斎北副部長だつた。

そして、沈黙を破つた一言が、

「根性ねえな」

だつた。

顔のわりに、けつこうキツイ性格とみた。まあ、確かに私もそう思うけどね。

次に口を開いたのは美人な先輩、名倉あや子さんだつた。

「別にいいじゃないの。いつものことじやない。あなただつて悪い氣はないでしょ、あんな可愛い子達に慕われて」

「まあ……な、でも、好かれるつてのも大変だぜ?あや子はどうなん

だ？」

「あたし？ あたしは別に平気よ、だってみんな可愛いじゃない」

「あ、そ」

そう言つて、斎北副部長は奥の部屋に行つてしまつた。あたしのことなんてすっかり忘れてるみたい。なんか存在を無視されたみたいで、ちょっとムツときた。

でもあたしのことを見付けてくれた先輩がいた。富内部長と水野先輩だ。

「残つたのは君だけだね、名前は？」

「はい。一年E組 江藤裕希です」

「じゃあ、江藤さん。これからテストやりうと思つけど、大丈夫かな？」

「はい、大丈夫です」

「じゃ、聖。あと頼む」

「オーケイ。それじゃあ江藤さん、今から十分後に、体操着に着替えてグラウンドに」

「わかりました。じゃ、失礼します」

教室にはもう誰もいない。

ちょうど今、午後三時をまわろうとしている。

こんな時間ではみんな帰つてしまつてゐる、部活に入る人達以外は。

着替えが終わり、教室を出る。そして長い渡り廊下。

この渡り廊下は、三つの名前をもつてゐる。

それは昼と夜、昼の時は「キューピット・ロード」これは、お昼休みになるとカップルが多くなることから、つけられたのだそうです。そして、夜の名は「オレンジ・ロード」夕方になるとこの渡り廊下全部が、夕陽で染まることからつけられたそうです。

たしかに、夕陽に染まつたこの廊下はすごく奇麗だ。

グラウンドには、水野先輩だけがいた。

「じゃ、始めるよ。タイムとの勝負だからね」  
ピストルを構える。

「よーい…」

水野先輩のかけ声がかかり、

パンというピストルの音とともに、私は走り出した。  
十キロならまだ平気だ、なぜなら、体力がなければあの仕事は、  
やつていられない。

それで、二十六分で難なくクリアー。楽勝だね。

そして次の暗記と判別。これもできなければ、勤まりません。  
最後は瞬発力。

これはそんなに必要じゃないけど、ちょっとでいいかな程度。  
一で。無事に約一時間で終わってしまった。

それで、全然バテていない私を見た水野先輩は、ビックリして  
た。（フフン）

「江藤さん、すげーね君。特にマラソン、陸上やつてたの？ 中学  
時代」

「いいえなにも」

言えるわけがない、本当のことなんて。

絶対に。

「結果は今日の夜にでも電話するよ」

「はい」

それで私は、家の電話番号を書いたメモを渡した。

大丈夫だよね、今日は仕事入れないよう寺島さんに言つといった  
し。

「じゃあ、気をつけて帰つてね」

「ハイ、さよなら」

教室に戻り制服に着替えて、そして家に着いたのが午後五時。

プハーッ！

お風呂上がりにほやつぱり、麦茶に限るわ。麦茶の一気飲み！ほんとは、ビールのほうがいいんだけどね、まだ私は未成年だからおあずけってわけ。まあ飲んじゃうときもある、すごく嫌なことがあったときなんかね。やつぱり、じついう仕事をしているとね、いろいろあるのよ。

ピロロロロッ

明日の支度をしていろと、電話が鳴った。

「はい。江藤です」

富内部長からだつた。

「江藤さん、おめでとう、合格だよ」

「本当ですか？」

「ああ、明日から正式部員だ。じゃ、明日放課後、部室で待ってるよ」

そう言つて、富内部長は電話を切つた。

しばらくの沈黙。

「…やつた…」

ポツリと呟く…。

ヤッター！ 心の中で叫ぶ。

正式部員だつ。

とと、嬉しさのあまり、コップを落としそうになつてしまつた。アブナイアブナイ。

まだ、何の部に入るか言つてしませんでしたけど、明日から私は、探偵部員です。

## 第1話・初仕事・

タツタツタツタツ、タツタツタツタツ。

うひーー、完璧に遅刻だあ。

よりによつて今日日直と掃除当番なんだもんない、参つた。  
でも大変かな、仕事と両立するのは、けど、ずっと入りたかった  
し。

寺島さんに言つたら、怒られるだらうな。なにせ、私たち暗殺者  
にとつて、探偵・警察は敵にあたるからね。

「裕希さん」

ふと、誰かに呼ばれる。

立ち止まつて振り返つてみると、名倉先輩が、教室から出でてくる  
ところだつた。

「一緒に行きましょ」

私と先輩は、一緒に部室に向かつた。

このときでも先輩は、やつぱり注目の的だつた。

ゆつくり歩いている先輩に、

「急がなくていいんですか?」

と、尋ねる。

「あや子でいいわよ。うちは、その田その田の部員の予定を全て、  
コンピュータに入力されているから大丈夫。心配しないで」  
と言つて、ニッコリ笑つた。

ウーン、まぶしい。

「へえ、すごいですねえ」

ほんとスゴイ。

まさかここまでちつちつしていんなんて、私の田に、狂いはなか  
つたわ。

と、裕希はニッヒ笑う。

「ンンンンッ。

力チヤ。

「こんにちはー」

うー、なんかキンチョー。

ほんとに部員なんだなあ。

でも：あれ？ 部長と水野先輩がいない？

部室の中には斎北先輩しかいない。

「やあ、裕希ちゃん。待つてたよ。合格おめでとう」

「あ、ハイ。ありがとうございます」

「依頼人来てるの？」

あや子さんが言った。

何か意味があるのだろうか、部長達がいないと。

「ああ」

「依頼人が来たときは、健吾と聖が依頼内容を聞くのよねえ…。

依頼人で、どんな人だろう。

と、隣の部屋から、部長と水野先輩が出てきた。そして、依頼人らしき人も。

「それでは、結果が出るのに一週間かかるので、結果が出しだい、こちらから連絡します」

「健悟、あの子」

依頼人の人が出ていったあと、あや子さんが、ちょっと困惑した顔で言った。

「ああ、伊藤の彼女だつた子だ」

「たしか…、近藤ふじみって子だる、いつたい今更何の依頼なんだ？」

「伊藤？ いつたいどういう：

それでさつきの女の人が、その人の彼女だったわけで、何で過去形なだらう。

その答えはすぐに解けた。

「裕希ちゃん、一ヶ月前、うちの学校であつた事件って、知ってる？」

富内部長が言った。

「一ヶ月前ですか…」

一ヶ月前、ねえ…。

そうだなあ、仕事がいっぱい入つてたときだつたなあ、あんまりつていうよりほとんど、新聞・テレビとかつて見てなかつたからなあ、んーつ、この学校で…

「…あつ、たしか自殺したっていう…あれですか？」

そう、一ヶ月前この学校で、飛び降り自殺があつたんです。正確に言つと、この学校の生徒がビルの屋上から飛び降りたというのが本当なんですけどね。

自殺をした理由はハッキリとわからないんだそうです。でも、屋上に遺書らしきものが靴と一緒に置いてあつたことから、自殺と判断されたそうです。

「そう、それなんだ」

「でも、いつたいそれと何の関係があるの? 健吾」

うん、私も知りたい。

「依頼内容がそれなんだ」

「どういうことだ?」

富内は、水野先輩に合図を送つた。

「実は彼女、ずっとこのことに関して、納得がいかなかつたんだそうだ。それで悩んだすえ依頼をしに来たらしい。内容は、本当に自殺かどうか調べてほしいのことだ」

水野先輩はパソコンに向かい、何やら資料を呼び出した。  
出てきたデータは、どうやらさつき出てきた伊藤という人らしい。

「この人がそうなんですか?」

「そう、当時一年だった、伊藤勝」

…もしかして

「もしかして、全校生徒のデータが全部、この中に入ってるんですか？」

「もちろん入ってるよ、あと、『』『』辺の高校のデータもね」

ハハツ。

参ったね・・徹底しそぎだねこりや。

「…でも、調べるとしてもこれじや、詳しい事がわかりませんよねえ」

と、私が言うと。

「その通り、しかも俺達の頭の中では、自殺となつてているから、まづその考えを消して取りかからなければならぬ。それから、もう一度彼女に詳しいことを聞く、伊藤は生前何か言つてなかつたかを、まずそこから始めよう」

「じゃあ、彼女を呼んでくるわ」

部長と近藤先輩は、隣の部屋にいる。

私達は、モニターで一人の会話を聞いている。水野先輩は聞きながら、内容をパソコンに入力している。

だいたい、この部のシステムはわかつた。

「ちょっとお聞きしますが、彼が亡くなる前に、何か言つていませんでしたか？ どんなことでもいいですから」

「……」

近藤先輩は、下を向き考えている。

そして、どうやら何か思い出したようだ。

「…たしか、亡くなる一日前です、その日は何だかいつもと違つた様子で、ちょっと顔が青ざめていました。そして彼、こう言つたんです。『大変なことに…、親父を止めることが、できないかもしれません。俺は…、大変なことを知つてしまつたんだ』と、…彼はそれ以上、何も言いませんでした。私は何が何だかわからなくて、次の日彼休んだんです。そして…、翌日…」

近藤先輩は、ポロポロと涙を流している。

かわいそうに、どうやら思い出してしまったようだ。

「辛いことを思い出せてしましました。ですが、これも彼のためです。ご協力感謝します。また、お聞きすることがあるかもしれません、でわ、ありがとうございました」

力チヤ。

近藤先輩が出てきた。

「でわ、結果をお待ち下さい」

「失礼しました」

そう言って、近藤先輩は出でいった。

「聖、入力終わつたか？」

「ああ、できますよ」

ずっと打ちっぱなしだつたもんね、水野先輩。

「しかし、どうこうことだらうなあ、さつきの伊藤の言葉」

本当に…。何か含みのある言葉よね。

「父親に何か、関係ありそうですよね」

「そうね、あの話からするとそつなるわね」

「よし、まずはそのあたりから調べてみるか」

部長が、引き出しから何やら取り出して言った。それは、伊藤勝の住所だった。

「チームを作りう。伊藤の家に行く班、図書館に行く班、ここは一人だな、あとは、伊藤の身辺調査の班だ」

うーん、家のほうに興味があるなあ、でもここはやつぱり、一人で行動できる図書館にしどくかないつベルが鳴るわからないし。よしつ。

「あの、あたし図書館に行きます」

「…そうだな、図書館のほうが安全だしな、いいよ。じゃあ、決まりだな、俺と聖は伊藤の家、貢とあや子は調査、明日の休日使つ、オーケイ?」

「了解」

全員意義なし。

ピーピーピー。

午前五時、部屋に響き渡るポケットベルの音。そう、これは仕事の依頼だ。そういうえば、まだ一つ残っていた。たしか三日前にきた依頼だつたはずだ。どうせ早く片付けるといつんだろい、まったく。テーブルの上にあるポケットベルを取る。

やつぱりベルには、『はやく済ませろ、期限は今日まだだぞ』と、入っていた。

裕希は、ため息をつきながら起きあがる。

「それじゃあ、さつさと片づけて、部活の仕事にからなきやな」仕事用の服に着替える。

服は、紺色の黒のストライプのパンツ、上は白のハイネックのトレーナーに、下と同じ紺のジャケット、そして、レイバンに革手袋。今回の射程距離はそんな遠くない、愛用のリボルバーで十分だ。

午前六時半過ぎ。

ターゲットはまだ眠っている。

私は、一つ挟んだ空き家にいる。

周辺の家に人がいないことは調査済みだ。そして、空地が多いかも、銃声は気にすることはない。消音銃で音が出ないように消してある。

この仕事をしていくことがある。

スマートからターゲットを見る、引き金を引く瞬間まではこの人が生きるも死ぬも私次第なんだと、でもそう思つのも一瞬だけ。引き金を引く…。

「… たよくなら…」

一つの仕事に、そう時間はかかるない。

「さて…、図書館に行こつかな」

銃はばれないようにケースに入れ、ショルダーバックの中に。

そろそろ、寺島さんに報告しておかなければね、クスクス。

「遅いって、文句言われそうだな」  
まあ、いつか。

クスクス笑いながら、図書館へ向かつ。

七時を少しまわった頃。

図書館に着く。

電話、電話つと……。

「あ、あつたあつた」

寺島さんの店にかける。

寺島さんは、「H E L P」というクラブのマスターをしています。  
仲介屋は、副業といったところですか。よく私も飲みに行きます。  
学校には内緒ね。

プルルルル、プルルルルー。

ガチャツ。

「ハイ、クラブ・ヘルプです」

相変わらず、いい声してるなあ。

「お店繁盛してる? 相変わらずいい声してるね」

「おかげさまで。貴方もお変わりないご様子で。どうやら、済んだ  
ようですね」

と、ため息まじりの声で寺島が言つた。

クク、思つた通り。

「ええ。終わつたわ」

「まったく、貴方の悪い癖ですよ」

「はいはいわかつております」

「…ところで」

ん、いきなり口調が変わつた。

「…仕事かな。

「…仕事?」

「違います。仕事もそうですが」

間髪いれずそう言った。

な、何だろ？

「じゃ…、なに？」

と、ちょっと恐る恐る聞いてしまった。情けない…。  
このときは、自分が探偵部に入っていることなど、すっかり忘れていた。

寺島に言われるまで。

「高校生活は、楽しいですか？」

「あ…。バレちゃったのね」

相変わらず情報早いんだから。

まつ、バレちゃうがないけど、でも…なぜ私の行動がわかるんだ？

…まさか…。

「まったく、いったいどうこうつもりなんです。バレでもしたら」  
ムツ。

「大丈夫よ。そんなへマはしないわ」

「心配はしていませんよ、貴女を信じていますから」

あら。初めて聞いたわ。

「それにね、この部はすごいわよ、いろんな機器がそろってて、ある意味利用できるわ」

そう、こぎとこうとき、使わせてもらつわ。

「くれぐれも気をつけ下さい。仕事のほうは、後ほど連絡入れます」

「うん、わかつたわ」

電話を切った。

フツ…。

私は、電話を切り言つた。

「変わつてゐるね、暗殺者を心配するなんて」

仲介屋が暗殺者を心配することはありえないのだ。ほとんどの暗殺者は組織に入っている、仲介屋も属していることが多い。私は、

どの組織にも入っていない、理由は一言で言えば面倒だし、何より、組織のやり方が嫌いだからだ。まだほかにもあるが。

暗殺者が死んでも仲介屋は困ることはない。組織に属していればすぐにはかの暗殺者があてがわれることになつていてるからだ。

まあ、組織の中にも、ましな者もいるが。

寺島は私専属の仲介者だけど・・

組織の人間だ。

と、私も変わったか、仲介屋とこんな風に会話をするなんて、以前の私だつたら…。どうかしてるな。

「……さて…、調べますか」

午前九時過ぎ

宮内と水野は伊藤勝の家の前にいる。

「父親、いるだろ? な? 聖」

「確かにですよ、ここ最近、家にいないことが多かつたようだけど、ちゃんと連絡を入れておいたから」

「さすが」

と言いながら、インター ホンを押す。

しばらくして、父親、伊藤周蔵が出てきた。

一人を見て。

「息子の先輩の方だね」

と言つた。

「はい。突然お伺いして申しわけありません」

父親は、門を開けて

「お茶でも出そう」

そう言つて、一人を招いた。

力チヤカチヤ。

「…どうぞ」

「…」

「…」

「いただきます」

父親は、ソファーに腰かけると話し始めた。

「そうだな……何を話そつか、まさかこんなことになるなんて、思つても見なかつたからな。……勝は、私が言つのも何ですが、本当にいい子でした。正直者で、自分のことのようくに考え込むんですよ、何にでも。まあ母親を早く亡くしてますから、その影響もあるんでしようけど……」

目線は下に向いている。

二人は、顔を合わせる。

「彼女がいたことはござ存じでしたか？」

水野が尋ねる。

一瞬、ほんの一瞬、父親の表情が変わつたことに、二人は気付かなかつた。その表情は、殺意を含んだ、冷酷なものだつた。

「彼女……いや、知りませんでした。そうですか、彼女がいたんですか、名前は何というんですか？　その子には、悲しい思いをさせてしましましたね」

父親は額に手をあて、うつむいてしまつた。

富内と水野は、顔を見合せ言つた。

「おじさん、僕たちこれで失礼させていただきます。ごちそうさまでした」

二人は席を立つた。

父親は顔を上げて、

「そうかい」

玄関に立つた二人に、申しわけなさそうに言つた。

「せつかく来てくれたのに、何のお構いもできなくて、すまなかつたね。今日はありがとうございました」

二人は、そんなことはありませんといつて、伊藤の家をあとにした。

二人は、図書館に向かいながら話している。

「健悟、彼女の名前言わなかつたね、どうしてだ？」

水野は、一つの疑問を富内になげかけた。

富内は少し黙つて、

「聖と同じことさ、もし彼女の言つていることが本当なら、あの父親は俺たちの前で赴居をしていたことになる、そして、彼女の名前を出してしまつたら……、彼女が危ない、そう思つたからだ。あくまでこれは推測だけだ」

もし俺の考えが当たつていたら……、最悪だなと思つ、富内だった。

水野はニッコリ笑つて、

「さすがです。さつ、裕希ひやんのところに無事ましょ！」

「そうだな」

「すいません、パソコンお借りします」

図書館の最上階にある、コンピュータルームにいる。

ふだんここに入れるのは、許可証をもつた人のみが入室できる部屋です。私は、もう常連とまではいかないけど使わせてもらつています。許可証をちゃんと見せてね。

「今日は誰もいないので集中できますよ」

受付のお兄さんが、ニッコリ笑つて言った。

私はいつもの場所に座る。そこは端っこで、しかも、入口から見えないのでやりやすい。まあ、だいたいみんな席が決まつている。

カチヤカチヤ…

パソコンに向かい、資料を呼び出す。

「んーと、まずは、伊藤勝の母親について調べますか」

ピッ、ピッ。

『伊藤加奈子、東京生まれ。二十一歳のとき、伊藤周蔵と結婚。一年後、長男・勝を出産。十年たつた後、夫とおり合いが悪く離婚。自殺を図り死亡』か。

「……」

これだけではわからないな。

……何かが変だ…。

たった十歳の子供を残して自殺なんてするだろ？ いきなり自殺するなんてありえないし、きっと何かがあった。伊藤加奈子は、夫の何かを知っていたんだろうか、それで口論になり……。

「…ちょっと飛びすぎか」

まつ、そんなにはハズレていらないだろ？ 何にしても、伊藤周蔵を調べないことには、解決しないか。知っている人は、もういないわけだから。

そうなると…。

「ブラックリストしかないな、ちょっと危険だけど。B・Bよりも簡単だけだね」

B・Bとは、リストの裏の情報が入っているのだ。  
でも…そこまでする必要はない…か。

所詮、ただの学生のすること。詳しく知る必要はないか。

まあ、伊藤周蔵を殺してほしいという、暗殺の依頼があつたなら別だけど。

ピピーッ。

画面に、受付のお兄さんからの連絡が入ってきた。

『お仕事中失礼いたします。お知り合いの方が、お待ちしております』

どうやら、先輩たちが来たらしい。

「何かわかったかな」

受付のお兄さんに、お礼を言つて下に降りた。

「健悟、聖。早かつたわね」

あや子たちが奥のほうから出てきた。

「『』苦労さま。何かわかったか

あや子が空振りを振る。

「だめね、全然だわ」

「そうか」

「富、そっちのほうはどうなんだ？」

「まちまちってどこか」

「お前たち一人の考えはどうなんだ」

富内は少し間をおいて、

「最悪の考えだな。ただ、伊藤が父親の何を知っていたのかがわからぬ。ヤバイ事なのは確かだがな」

「思ったより、複雑みたいね」

あや子がため息をつく。

そんな四人の話のやり取りを、裕希は棚の陰から聞いている。

「……」

ふむ。先輩たちも同じ考え方のか……。

ほんとに、伊藤勝は何を知ったんだ……。

「ところで、裕希ちゃんはどうしたの？」

「ああ、今呼び出してもらつてる」

「あつ、來ましたよ」

「すいません。お待たせしました」

あたかも、急いで来たかのようにする。

もちろん、コンピュータルームにいたことは内緒だ。そのことは、受付の人たちも知っている。

「何かわかつたかい？」

部長に聞かれて、母親のことを話す。

「母親は、六年前に亡くなっていたということだけで、あとはわからりませんでした」

「亡くなつた原因はわかる？」

裕希は少しだめらい、自殺だと言つた。自殺した理由は言わなかつた。言わないほうがいいと思ったからだ。これは、この人たちに言つてはいけないと、そう直観したか。

言つてしまつたらきっと、この人たちは調べてしまうだろう、何ともかも、たとえ依頼人に全てを話さなくとも。

「……自殺か……」

みんなそれぞれ考えこむ。

宮内が口を開く。

「仕方がないな、俺たちではこの辺が限度だろつ。きっとこれから先は、俺たちでは手にあまるだろうからな。第一、もしわかつたとしても」

「彼女には言えないわね」

あや子さんが言った。

「そうだね」

水野さんがそう言い、斎北さんも頷く。

そして、私は…？。

「謎は謎のまま、知らないほうがいいこともある。残念だが彼女には自殺と」

「待つて下さい」

宮内の言葉を、裕希が遮った。

みんなの視線が、裕希に向けられる。

自分でも驚いている。とつさに出た言葉、でも、このまま終わつてしまつ、彼女が真実を知らぬまま終わつてしまつことが、何だか、スッキリしなくて嫌だと思つた。

「…どうしたの？」

あや子が聞いた。

「…もう少し、もう少し依頼人に言うのは待つて下さい」

みんな『えつ？』という顔をしている。

「…えと、あの…。知人にルポライターがいるので、その人に頼もうかと。このままでは、スッキリしなくて…」

みんな黙っている。

自分でも何言つてんのかわからない…、だいいちそんな知人はいない。

「…いいよ」

え？。

「ただし、期限内に新聞に載らなかつた場合、依頼人にはさつきの

通り報告するからね。ここ?」

「はい。ありがとうございます」

ほんとこ、調べ上げなきやならなくなってしまったな、ひとつや。

## 第2話・裏切り・

午後十時・自宅

今までのことをまとめた。

伊藤勝が十才のとき、母親が自殺をする。原因は不明、夫との不仲によるものとなっているが、定かではない。

六年後、今度は息子が自殺。自殺をする一日前に、彼は気になる言葉を残している。しかし、父親の何を知ったのかはわからない。

やはり…父親か。

全ての鍵を握るのは、父親にある。

「どう考えてみても、…だな」

寺島からの連絡がないので、寝ることにした。

早朝、授業が始まる前に、富内部長のところへ頼み事をしに行く。

「どうした？」

出入口では邪魔になるので、窓側によつて話している。

「お願いしたいことがあるんです」

「うん。何？」

「伊藤勝の家に行きたいんです。彼女として」

「…彼女として？」

「はい」

富内は少し険しい顔をしている。当たり前だ。それがどれだけ危険かわかっているからだ。

裕希も、そんなことは百も承知だ。

富内は、裕希が本気だとわかり、険しい顔のまま

「わかつた。ただし、俺も一緒に行く、一人ではダメだ、わかつた

？」

「はい。ありがとうございます部長」

「じゃあ、放課後部室でな

富内は裕希の頭をポンポンと叩いて、教室に戻つていった。

授業中ベルが入る。仕事の依頼だ。  
どんな依頼かは、直接仲介者のところに取りに行く。そこで確かめて、受けるか否かを決める。

放課後、富内が今朝の事を皆に話す。

さすがに、最初は皆反対したが、富内と一緒に「いい」とで納得した。

「それと裕希ちゃん、明日は用事があるから明後日でいいかな?」「はい、構いません。何時にしますか?」

私もそのほうが都合がいい。

仕事が入つてなければ別にいいんだけど。

「そうだな、昼の十一時に『HELE』でどう?」「えっ

なに。。。

「ヘルプって店、知ってるよね」

「…はい、知っています」

「お昼食べてから行こう」

「割引がきくもんな、そこでバイトしてくるんだぜ、裕希ちゃん」「バイト?」

斎北先輩はたしかにそう言つた。

なんてこと、あ…、でも昼と夜どっちだらつ。

「…昼のほうですか?」

「いや、夜のほう。時給いいからね」

ガーンッ

よく今まで会わなかつたな。いくら変装していてもすぐわかっちゃうしな、今度から絶対にサングラスは外せない。

まいったな。

今度、寺島さんに「いつとかなきやな。

「裕希ちゃん、健悟が女の子に食事おいるのなんて、ないのよー。ねえ、健悟」

あや子さんがからかう。

「人による」

富内部長はそれしか答えない。

斎北先輩と水野先輩は、ニヤニヤしている。

「良かつたわね、裕希ちゃん」

と、あや子さんが一ツ「コリ」と言つた。

「ハア…」

気に入つてもらえたのは嬉しいけど、なんだかなあ…。ハハッ  
心の中で、苦笑いする裕希だった。

「ほんとにまいったわ」

依頼を確認するために、寺島の店にいる。もちろん、サングラス  
はしている。

例のことを話した。

「貴方はもちろん知つていたのよね、マスターだもの」

「はい」

寺島は言しながら裕希の前にカクテルを置いた。

「ありがとう」

「先程のお話ですが、貴女とは鉢合せしないようにしてみます」

「じめん、ありがとう」

「これが、今回の頼黒書です」

頼黒書とは、いわゆる依頼書のこと。我々の間ではそう呼ばれて  
いる。

依頼内容と、ターゲットの調査書を読む。

依頼主は…、伊藤勝だった。ターゲットは父、伊藤周蔵。理由は

書いてなかつた。ただ『父を殺して下さい』とだけだつた。

理由は言いたくない…か。

本来ならば、理由がはつきりしない類のものは受けないのだが、今回特別だ。

伊藤周蔵に関する調査結果は、黒と出た『九年前に麻薬取締法違反によつて逮捕、三年後に出身。だがその後も密輸など、以前より派手になる。しかし、そのことは警察は知らない。それだけ手口が巧妙になつてゐる。

水島加奈子と結婚。息子、勝が生まれる。

勝が九才の時、加奈子は伊藤のやつてゐることを知つてしまふ。問いただすが、伊藤はやつていないとしきりが決定的証拠を見付けてしまう。勝十才の時、可奈子は殺される。自殺したかのように。後、息子を育てる。勝十六才のときに母親同様、父親の秘密を知つてしまふ、今年三月十日、某ビルにて、母親と同じく殺される』

「……」

やつぱり…、考へていた通りだけど、先輩達が手を引くことにして良かつたな。

カクテルを一口飲む。

「・・この依頼受けるわ」

「では、四日以内に済ませて下さい」

四日か…。

なんとかなるな。

「わかったわ」

一気にカクテルを飲み干し、頬黒書を持って席を立つ。

…今日の寺島さん、いつもと様子が違つてたなあ。やけに無口だつたし、どうしたんだろう。

などと思いながらアジトに行く。

アジトとは…まあ、依頼を受けて終わるまでの間は家には戻らず、暗殺者「カーリー」として住んでいるところです。この場所は、寺島さんも知りません。電話番号だけは教えてありますけど。アジト

は、マンションの最上階にあります。

アジトから学校に行く、本来なら学校は休むのだが、事情が事情なだけに行く。

今日は、部活がないので図書館へ行く。一つだけ調べておきたいことがあった。

コンピュータルーム。

気付かれぬよう、B・B<sup>ブラック・ボックス</sup>に入り込む。前にも説明したが、正確にいうとこれは、裏の国家機密にあるものだ「通称・裏国」と呼ばれている。

前にも言った通り、リストまでは簡単に引き出せる。でもボックスはそうはいかない。バレた場合は一つ、それ「死」だ。

昔、一度だけ引き出したことがある。まだ一人でいた頃に。

その時は運よくバレなかつたが、今回バレないとは限らない、だが調べなければならない。

B・Bに載っている人物を殺してはならない…。裏国はわざと生かしているのだから。もしも知らずに殺してしまふと、厄介なことになる、下手をすればこれも、「死」につながる。まあ、その死に方にもよるが。

伊藤周蔵が載っているか載つていなか。調べ始めると、アクセスしてくる者がいた。様子を見る、名は出さず問う。返答は…、なんと、名を出してきたのだ。名は黒木竜次。相手が名を出したからといって、こちらの名を出すわけがない。

用件を問う。

返答…

『伊藤周蔵の暗殺を許可する』だった。

裕希は、『どうも』と返事して切った。  
しばらく考える。

チツと舌打ちをする。

「…味な真似してくれるじゃないか」

誰だか知らないが、よく伊藤周蔵を調べているとわかつたな…。  
なぜだ…？

なんにせよ、侵入は失敗したところだ。  
「くそつ…」

アジトに戻り、寺島に連絡する。

黒木竜次という人物が存在するか調べるように言う。

裕希の中では裏国のものだと、それもかなり上の人物だと…直感  
している。

翌朝、富内との約束の時間より早くついたので、店の中に入り窓際のテーブルに座つて待つことにした。

寺島とは会話をしない。

窓の外を見ながらボーッとしていると、ポンッと肩を叩かれた。振り返ると富内部長が立っていた。

「待たせたね。席とつしてくれて助かつたよ。昼時は混むからね  
そう言いながら席に座る。

「いらっしゃいませ、ご注文は何にいたしますか？」

店員が、注文を聞きに来た。

「何にする？ 何でもいいよ」

「じゃあ、サンドウイッチとコーヒー」

「俺はランチでコーヒー、お願いします」

「かしこまりました、少々お待ち下さい」

そうして食事をしながら時間を潰す。

食事を終え、店を出る。

「部長、本当にお金いいんですか？」

「ああ」

「ありがとうございます」

ほんとは、おじりてもらつたりするのは、あまりとこりゆつ、したくないんだけど、まあいいか。

伊藤の家に着く。

「いますかね？」

居なかつたら意味がなくなつてしまつ。

「さあどうだらうな。今日は連絡入れてないからな」

ピンポーン。

インター ホンを押す。

しばらくして、伊藤周蔵が出てきた。

「…ああ、この間の人だね、おや、そちらの子は？」

突然お伺いしてすいません。彼女は勝君の彼女だった、江藤裕希さんです。どうしてもお線香をあげたいと

「はじめまして」

おじぎをする。

「…いつが、伊藤周蔵か…」。

「そうですか、あなたが勝の…立ち話もなんだから、奥へどうぞ」

「おじや まします」

「コーヒーでいいかな？」

そう言つて、テーブルの上に置い 。

「どうぞお構いなく。すぐ失礼しますから」

伊藤は裕希のほうを見ている。

裕希は下を向いているが、気付いている。  
殺氣まじりの視線…。

顔を上げる。伊藤と田が合ひつ。

「…何か？」

「いや、こんな可愛い人が勝の彼女とは、あなたにはなんと言つたらいいのか…」

「そんな、あたしのほうは大丈夫です。おじ様のほうは心配を使わいで下さい」

我ながら、けつこいつ良こそ芝居だ。

「ありがと、」

伊藤は、下を向き頭を押さえている。

「……」

部長のほうを見る。部長は頷く、

「僕達これで失礼します。」立ち去りました

席を立つ。

「そうかい？ また遊びに来て下やつ」

「はい。お邪魔しました」

残念だけど、また…は、ないよ。

部長に家まで送つてもうつていて。もうひん実家のほうだ。

裕希は、富内に一つ質問した。

「先輩、前回もあの父親は、最後に顔に手をあてて下を向いてました？」

「ああ、そういうふうだね」

「…ですか」

「それがどうかした？」

「一つわかったことがあるんですね」

まあ、これは言つても大丈夫でしょう。先輩も思つていたことだらうから。

「何がわかつたんだ？」

「あの父親は、息子の死を全然悲しんでいません。みんな芝居です」  
部長はしばらく黙つていたが、一呼吸おいて言つた。

「…俺も、今日来て確信したよ。認めたくはないけどな」

「誰でもそうです」

いろいろ話していくうちに、家に着いた。

「今日は『いりのそつ』まででした」

「いや、裕希ちゃんも芝居上手かつたよ。それじゃあ部活でね」「はい、ありがとうございました」

富内の姿が、見えなくなるまで見送る。

冷たい笑みを浮かべる。

伊藤周蔵が付けてきていることは気付いていた。

「所詮、素人だね」

アジトに行こうと向を変えたとき、家の中に誰かがいる気配を感じた。

電気はついていない。ところとは、父親ではない。

「……」

気配を消して玄関に近づく。鍵を開け、銃に手をあてながら中に入る。

気配の主はリビングにいる。

念のためサングラスをかける。

リビングのドアを開ける。

相手からは、殺氣を感じられない。

「……誰……」

問い合わせても答えない。

……せだだわからないが、黒木竜次だと思つた。無論、会つたことはない、が、そう感じた。

だが違つたのだ、気配の主は寺島だったのだ。

いつもと気配が違う。しかし、黒木だと感じたのも嘘じやない。どういうこと……。

……まさか。

でもそう考へるとなぜ私の行動を知つていたのか納得がいく。

私生活のことは、一切口にしないのが決まり。知つているものもいるが、互いに了解していなければならぬ。

結論。寺島＝黒木。

裕希は、銃口を黒木に向かた。

この時点では、暗殺者カーリーになる。

カーリーは、銃を向けたまま

「契約は、白紙に戻す」

と、命令口調で言った。

寺島、いや黒木が、封筒を置いた。

見なくてもわかつた。黒木の調査書だ。

「…どういうつもり？ バカにするのもいい加減にしてほしいね  
「バカになどしていません、あなたを、騙すつもりはありませんでした」

カーリーはため息をつく。

「言い訳はいい」

銃で、帰れと促す。

黒木は動かない。

ハア…。

仕方ない。

「今日は見逃してあげる。出でいく気になつたら、鍵閉めて行つて  
ね」

銃をしまい出していく。

門を出るとき、何かが足に触つた。

瞬間。左腕に激痛が走った

「…っ」

チイ…。左腕に矢が刺さっていた。

ガサツ。

逃げて行く気配が一つ。

「…奴か」

ただの脅しだね。殺す気なら、今までみたいにするだろ？  
わざわざ彼女の振りをしたんだ、これぐらいしてもらわなければ。  
まあ、矢が飛んでくるとは思わなかつたけどね。  
痛ッ…。

「つつ…」

矢を抜く。

「怪我の治療しにアジトへ戻るか。

と、その前に。

「黒木、さすがに気配を消すのはうまいね。でも、気配を消して私の後ろに立たないことだ、死ぬよ」

黒木が後ろにいることは気付いていた。簡単なことだ、玄関の扉の閉まる音がしなかつたからだ。

アジトではなく、再び家の中に戻る。

傷の手当をしている。

気分が晴れない…。

なぜこんなにも胸が苦しい？

「……明日は、部活だな…」

翌朝。

部活は午後からだ。

昨夜は一睡もしていない…。

「……」

怠いけど仕方がないな。

学校にでも行くか…。

休日でも部活のために門は開いている。

風が気持ちいい。

屋上に一人いる。

校庭で、野球部が練習している。ボールを打つ音が聞こえる。吹

奏学部の演奏も聞こえる。その他の音はない。

静かだ。

時が止まったみたいだ…。

「……平和、そのものだね」

私には、無縁のものだ…。

心の休まる場所は、もう ないのかかもしれない。

「ゅうきちやーん…」

ボーッと、景色を見ていると、呼ぶ声が聞こえた。  
下を見ると、あや子さんが手を振っている。

裕希も振り返す。

「おはよひづいやいまーす！」

階段をかけ降り、部室に向かつ。

「コンコン。

話合いでしていると、ドアがノックされた。

「はい」

あや子さんが返事をしてドアを開けた。  
男子が一人立っている。

「あら」

「こんにちは」

「今度は何の用だ。西岡」

と、部長が言った。知り合いのようだ。

「いやなに、ちょっと手を貸してほしいんだ」

「お前のちょっととは、当てにならないんだよ」

斎北が嫌そうな顔をする。

裕希は、先輩たちのやり取りを、ボーッと見つめていた。

「今回は大丈夫だって、ただちょいっとだけ、映画に出るだけだから

ら

「映画ーー！？」

四人声を揃えて言った。

「さすがつ。息があつてるね」

「おいおい。俺たちは便利屋じゃないんだ。わかつてゐるのか」

西岡はニッコリと笑う。

「もちろん。ビーセ今依頼入つてないんだろ？」

「まあ、入つてなくもないが…」

「じゃつ、決まりだな。詳しいことは後で連絡するから、じゃな、

よろしく

バタնシ。

そう言つて出て行つてしまつ

「相変わらずだなあ」

斎北が苦笑いをする。

「ホントよね。あつ、裕希ちゃん今の彼はね、… 裕希ちゃん?」「…」「…」

裕希には、あや子の声が届いていない。

無論、今までの会話も聞いていない。

みんなが裕希を見る。

「裕希ちゃん?」「…」

肩を叩かれ、よつやく氣付く。

「えつ、ハイ。何ですか?」「…」

みんなが自分を見ているのに氣付く。

「あたしの顔に何か付いてますか?」「…」

「ううん。それより裕希ちゃん、何かあつたの?」「…」

「えつ、別に何もない…!」「…」

ポタ…。

言い終わる寸前、一粒の涙が落ちた。

「どうしたの? 私たちに話せないこと?」「…」

あや子が裕希と同じ目線で心配そうに聞く。

「たいしたことじゃないなです。信頼してた人に裏切られたんです。

自分が勝手に信頼してただけなんですけどね」

「そう…、元気出して、私にはこれぐらいしか言えないけど

あや子の優しさが、痛いほど伝わってくる。

「いいえ」

その優しさが染みて、よけい涙が出てくる。  
自分でも驚いている。涙など出ないものだと想っていた。涙など

邪魔だと。

「……ちょっと失礼します」

裕希は断つて水道に行つた。

その間も涙は止まらない。

「こんなんじゃだめだ、失敗する。

……また一人に戻つたけだ。そう、自分に言い聞かせた。

涙は止まつた。

もう、今まで裕希ではない、そう、昔の誰とも組まなかつた頃の自分に……。

顔を洗い、一息つく。

「…………」

部室へ戻る。

部室に戻つてきた裕希は、いつも通りの裕希に戻つていた。

「大丈夫？」

あや子心配そうに聞く。

「はい……、もう平氣です」

このとき富内は、裕希の微量の変化に気付いた。

裕希が帰つたあと、富内はこのことをみんなに言つた。

「俺も感じた」

斎北が言葉。

「私もです」

水野。

「あたしも気付いたわ」

みんな気付いていた。

裕希は、 気付いていなかつた……。

アジトに戻つた裕希は、暗殺の準備をしている。

今回は遠くからではなく、ターゲットの前に姿を現して直接狙うこととした。

腕の傷のお礼をするためだ。

「…………」

玄関のドアをノックする音がする。

気配を消して、静かにドアに近づき穴から外を覗く。黒木が立っていた。

「…………」

電話番号を教えてあつたな。住所を調べることなどたやすいな。

「…………」

ドアを開すに聞く。

「…………」

小声で黒木が言った。

「…………」

裕希は部屋に戻り、必要な物をとりあえずケースに入れた。

玄関に行きドアを開ける。

ガチャ。

黒木を中へ入れる。

彼女を見たとき黒木は、彼女の『氣』が変化していることに気がつく。それは、昔の、初めて出会った頃の彼女そのものだった。

裕希は、裏国にここが知れてしまつたから変えなければならないなど、暗殺の準備をしながら考える。さつきケースに入れた物は、予備の銃やフロッピーなど、場所を移動するために必要な物だ。機械類は必要ない、あとで揃えればいいことだ。いつもそうしている。今度のアジトは地下にしようかな。

準備をしている裕希の姿を見て黒木は、

「傷のほうは大丈夫なんですか？」  
と、聞く。

裕希の動きが止まる。問いかねば答えない。

「…………」

用件は、

と、今度は裕希が聞く。

裕希は背を向けたままだ。

黒木は、裕希の後ろ姿を見ながら答えた。

「貴女を、騙すつもりはありませんでした。最初、出会った頃は貴女も、他の暗殺者と同じだと思つていました。だから、いつも通り監視していました。ですが違つた…」

「…だからあの時、アクセスしてきたと？」

裕希は、ゆっくりと立ち上がり、黒木を見る。

「……所詮アナタは、裏国人間ということよ。まあ、私も気を許したのが悪いんだけど、まったく、どうかしていたよ。……用はそれだけかい？」

完全に、以前の裕希に戻つている。

一度起きた奇跡は一度と起きない。今までの彼女に戻ることは、もう、ないだろう。

裕希は、黒木から目を離さずに言った。

「契約は白紙になつたんだ。用がなければ一度と私の前に姿を現すな。お帰り願いましょうか」

黒木は裕希の瞳の中に、悲しみの色が浮かんでいるのを知つている。それは今まで以上に増しているのを感じた。黒木は己の所為だと知つた。

裕希に近づき触れようとすると、銃をつけられる。

「死にたいか？」

「…構いません、貴女を裏切つたのですから」

そう言いながら、裕希の顔に触れた。

裕希は、顔には出さないが、少し戸惑つた。

「……」

黒木を殺す気はない。裏国を敵にまわすほど馬鹿ではない。

「…今夜は行かないほうがいい」

突然黒木はそう言つた。

裕希には、何のことだかわかつた。

「奴がないのか？」

「そうです…」

裕希の顔に触れたままだ。

黒木は、何か言いたそうな顔をしている。

「…なんだ」

裕希がそう聞くと、意を決したかのように口を開いた。

「…契約をして下さい」

裕希はため息をつく。

「そんなことが、それはできない。悪いけど、私は一人に戻ることに決めたんだ。誰とも契約をする気はない」

「契約をしなければ貴女を…」

黒木は途中で言葉を切ったが、裕希にはわかつた。

なるほど。

黒木の手をどけて、クッと笑う。

「私を殺すのか、…今のアナタには無理だ。しかし、これ以上親不孝するわけにはいかないのでね、死ぬわけにはいかないんだ」

このあと小声で、『死にたくてもね』と言つたことも、黒木は聞き逃さなかつた。

黒木から離れ、さつき用意したケースを持って、

「交渉は決裂だ」

そう言つて部屋を出た。

少し歩き、走り出した

バイクに乗り走り出す。

ナンバープレートは、かくしてある。

走り去る姿を、窓から見ている黒木。

一言。

「…裕希

と、呟いた。

すると、背後から声がする。近くにもう一人いたことなど、このときの裕希には気付かなかつたであらう。

「なぜ殺さない」

その声の主に黒木は、  
「彼女はまだ十六です」  
と答えた。

「ならば、父親が死んだことは私から伝えよつ。… // イラ取りがミ  
イラになつてどうする」

声の主は、そう言つて出て行つた。

「もう なつてますよ」

一人となつた黒木はそう呟いた。

先ほどの声の主は、車に乗り込み、部下らしき人物に命じた。

「カーリーを追え」

「かしこまりました」

裕希は図書館に入る。

もう一度、伊藤周蔵を調べるためだ。この間は、黒木の邪魔が入  
つたからな。

警備室に催眠ガスをまき、眠らせる。

眠つたのを確認した後、コンピュータルームに行く。

無事潜入できた。

椅子に座り髪を触つたとき、何か小さな硬いものに触れた。

「……」

見なれたものだつた、発信機だ。

発信機をコンピュータの横に置く。

黒木は来ないと確信していた。

かまわずデータを引き出す。が、データは消されていた。

「ちつ。遅かつたか」

伊藤周蔵のデータは、抹消されたのだ。

このとき、上に上がつてくる一つの気配に気づいた。

「なかなか、早かつたじゃないか

カツン…。

裕希の後ろに立つた。

発信機を後ろに投げた。

しばらぐの沈黙。

口を開いたのは、相手だった。

「カーリーに報告する」ことがあります。実は、貴女の父親、江藤洋一氏が亡くなりました。」 裕希の動きが止まった。

死んだ……？

父さんが……。

なぜ、こやつが……。

…まさか、それじゃあ……。

裕希は立ち上がり

「裏国の方が知らせたといふことは、父は…、父は裏国の者だったんですね。そして、私のことも」

「そうです」

裕希は、顔色一つ変えずに相手と向き合った。そして、浅く頭を下げ言つた、

「総頭自らのお運び、ありがとうございます」

裕希の言葉に驚く相手だった。

「なぜわかる」

その問いかけに裕希は、少しの笑みを浮かべた。

「『氣』が違う」

一礼をして去る途中、

「私を殺すのは、私が仕事を終えてからにして下さい」と言つた。

総頭は何も言わなかつた。ただ裕希の去る後ろ姿を見ていた。

「……」

このとき総頭の頭の中では、一つの考えがあつた。

裕希を追つた。

図書館から出てきた裕希は、バイクの前で立ち止まつた。

一粒の涙が、一方の頬を伝つ。

父親のことは、考えたくなかつた。

バイクに乗ろうとしたとき、総頭に呼び止められる。

「まちなさい」

「…何か」

裕希の前に、一台の車が止まる。

「……」

「奴はいつでも殺れる。少し私に付き合つてもらえないか?」  
返答はしない。

しばらく黙る。

「…いいだろ?」

「用件は?」

話を切り出したのは裕希だった。

「今後の貴のことだ」

「なに」

今後の私のことだと?

何を言っているんだこの男。

私とは何の関係もないだろ?」

「ハツキリ言え、何が目的だ」

総頭はタバコを取り出し火をつける。

その動作を冷たい目つきで見る。

「目的というより、私からのお願いです。先ほど言ったことも本当  
だ。…私の傘下に入つてもらいたい」

「…裏国に入れと?」

「そうだ」

…さつきと口調が変わってきたじゃ ないか。

自分の利益になることだけで、不利になることは考えんのだな。  
これだから組織は嫌いなんだ。

「私が入るとでも? 人に命令されるのは嫌いです。しかし組織と  
いう縄に縛られるのも大嫌いだ。私は今まで通り、一人でやつてい

く

「では、断ると？」

「そういうことになるね」

「私の願いは叶わなかつたようだ。では、別の願いなら叶えてもらえるかな」

「別の願い

「別の願いだと？」

「なに、たいしたことじやない。貴女が嫌というのなら無理に入れ、  
る気はない。だが、このままで、仲介者たちに我々の息がかかり、  
貴女は仕事が出来なくなる」

「……何が言いたい。アナタは総頭だろう、回りくどい言い方はよせ  
「私と個人契約してもらう」

「なんだと」

「仕事が出来なくなる前に、貴女自信がいなくなる。貴女ほどの腕  
の持ち主は、シリュウを抜かして他にいない。私は、貴女を失うわ  
けにはいかないのだ」

車は、いつのまにか家の前に着いていた。

ガチャツ。

運転をしていた部下が、裕希側のドアを開けた。  
裕希は何も喋らず降りた。

「良い返答を待っている」

ドアが閉まり、車は走り出した。

裕希は、その場に立ちつくしている。

「……もう一つ、仕事ができたわ……」

と、呟いた。

家中に入り、今後のことを考える。

私にはもう何もない。殺してくれれば気が楽なのだが、そんな気  
はないようだね。

もし、契約をしなかつたとしたら、殺さないまでも、操られるだ  
ろう。自我も失って、抜け殻のようにな。

そんのはご免だ。

しかし、奴と契約するのも嫌だ。

奴は、ターゲットが白でも殺しそうだ。

「……だけど、もう一つ仕事が出てしまった。……組織を潰すという

大事な仕事が」

### 第3話・決意・

明朝、伊藤周蔵のところへ行く。

氣配を消して家中に入り、奴の氣配を探る。奴はリビングにいた。私の氣配には気付かない。何か荷造りをしている。カーリーは少し離れてたつている。

「……何をしている」

そう話しかけると、奴はビクリと体を震わせ振り向いた。カーリーの顔を見たとき、少し驚いたが、笑顔に変わった。「どうしたんだね」と、優しく聞く。

その言葉に、冷たい笑みを浮かべた…。

「いえ、チャイムを鳴らしたんですが出てこないので、迷ひしたのかと思いまして」

冷たい言い方。

言い方でそれは嘘だとわかるものだ。

しかし、この男はそうとう動搖しているようだ。

「それはスマナイ、で、何の用かな」と、言った。

私は思わず、クッと、笑つた。

それを見た奴は、怪訝な顔をして言った。

「何がおかしいんだね」

「いや。…実は、あなたへの頼まれごと、お礼がありまして、ここへ来ました」

「頼まれごと?」

「はい。それよりもまず、お礼をわせて下せ」

「なんのだ」

「お忘れですか？私の腕に矢を刺してくれたお礼です」

「何のことだ？私は知らない」

奴はあまでシラを切るつもりらしい。まあ、いいだらう。

「…では、本題に入りましょう。私は、あなたを殺してほしいという依頼を、ある人物からもらい、あなたを殺しにきました」

その言葉を聞いた奴は笑いだした。

カーリーは冷たい目をしてそれを見る。

「何を言い出すかと思つたら、冗談はやめなさい。もしそうだとしても、いつたい誰がそんなことを頼んだんだね」

と、笑いながら言つた。

「あなたの息子からです」

「勝だと? …クツ。ハツハツハツ」

またか…。

だが、カーリーの冷たい目付きを見たとき、笑いは止まつた。  
やつと終わつたか。

「私は勝さんの彼女ではない。あなたを調べるための芝居だ」

奴は驚きを隠せない。

カーリーは笑つている。

冷酷なまでのカーリーの態度に、だんだんと恐怖がつのつていく。  
恐怖のためか、奴の声は震えている。

「ま…、待つてくれ、なぜ私が、殺されなければ…」  
ほおー。

ここまで来てもまだシラを切るか。

たいした度胸だ。

だがこれまでだな。

「理由など知らなくてもいい。…そうだな、一つだけ教えてやうつ、  
お前は、B・Bに載つていたよ」

「…載つていた…?」

なぜ過去形なんだ…。

「過去形なのは抹消されたからだよ。その意味はわかるだろう。さ  
あ、長話は終わりだ、奥さんと息子さんのところへ逝くとい。逝  
つて詫びるとい」

言ひながら銃を取り出し、奴に突き付ける。

「やつ…、やめ」

奴が叫ぶ間もなく引き金を引いた。

消音しているので、銃声は聞こえない。

「さよなら」

一言そう言つて、カーリーは去つた。

一度家に戻り、制服に替える。

午前十一時半過ぎ。

軽く昼食を取る。

コー ヒーを飲み、一息つく。

「疲れた」

今回は喋り過ぎた。いつもの倍は喋つてゐる。

短期間にいろいろなことが起こりすぎた。

「……」

父さんが、裏国人間だつたなんて、頭ではわかっていても、まだ信じられない。けど…、信じざるを得ない…、テレビで報道されていなきことが、そのことを証明している。

……どんな気持ちで…、手紙を書いていたんだろうか、娘が、殺し屋なんて、やりきれなかつただろうに…だから嘘をつけ今まで家には帰つてきたくなかったのだろう。

父さんを騙したまま終わつてしまつた。

そして、また、あの人達も騙したまま、終わつてしまつことになるのだろう、きっと。

「部活も…、やめなければ…」

学校と…ね…。

組織自体を潰すのは難しい。

へたをすれば、逆に殺られる。

しかし、奴の懷に入れば裏国の中に侵入するのは簡単だ。そして、

そつと機会を待つ。

期限は…、三日。

三日のついに潰す。

期間中、学校は辞めない。

昼休み三年の教室に行く。宮内に退部届を渡しこ。  
宮内を呼んでもらう。

「すいません、宮内先輩いますか?」

「宮? ちょっと待つて」

その人は、そう言って部長のところへ行つた。  
部長は何かを書いてる途中だった。

「宮、一年生が呼んでるぞ」  
「ん?」

宮内は書くのをやめて、入口を見た。

裕希は軽くお辞儀をする。

「可愛い子じやん、紹介して」

「ダメだ、だいいち彼女いるだろお前  
裕希のほうへ歩いて行く。

「君、名前は?」

「江藤です」

なんだこの人。

「ほら、彼女が待ってるぞ、早く行け」

「はいはい、じゃあね江藤さん」

「はあ」

そのい人は走つて彼女のところへ行つた。

何なんだあの人。

宮内はため息をついた。

「まったく、気にしないでいいよ、裕希ちゃん

「はい」

「それより、何か用かい?」

「あ、はい。実は…」

そう言つて、退部届を出した。

宮内は、何も言わずに受け取った。

何も言わずに受け取った宮内を見て、裕希は少し驚いたのと同時に優しさを感じた。

「部長…。ありがとうございます。すいません」

「謝る」とはない。誰にだつて人に言えないことがある

「すいません」

「みんな裕希ちゃんが好きだ。時々、遊びにおいて優しい言葉。

たいした言葉でもないはずなのに、それ以上の優しさがあった。涙が出てきた。部長に見られたくないので、下を向いた。

「部長、ありがとうございます…。それじゃあ、失礼します」

「ああ、みんなには言つておくよ」

お辞儀をして去つた。

…不思議だ。

先輩達の前だと不思議と涙が出てしまう。カーリーとなつた今でも。

「…不思議だね」

ああそうだ、奴が死んだ今、先輩達はどうするのだろう。あんなことを言つてしまつた私にも、責任があるのだが。

「あとで聞いてみるか」

だが、その答えはすぐに出た。

教室に向かつている途中、一年生が話しているのを聞いた。それは伊藤勝のことだった。

「ショックだね。自殺って聞いたときもショックだけど、まさか、父親に殺されるなんて」

「あー、今朝の新聞に載つてたやつでしょ。父親も自殺だつてね」

「自殺…か。なるほどね」

「近藤さん、ショックだらうねえ」

…フウっと、裕希はため息をつく。

ため息ばかり。でも、これでスッキリした。

部長も新聞を読んで知っていたんだ、だから言わなかつたんだ。

裕希は教室に戻つた。

放課後、教室に誰もいなくなるまで待つた。なぜだか一人になりたいと思つた。

ふせて寝ていると、廊下を走つてくる音がした。

一人だ。

それはだんだん近づき止まつた。

「裕希ちゃんっ」

いきなり私の名を呼んだ。

その声には覚えがあつた。

顔を上げ、走り寄つてくる人物を見た。

「あや子さん」

そう、あや子だつた。

あや子は入るなり裕希の手をガシッと握つた。

「…あや子さん？」

「部をやめるつて本当なの？」

「……はい…」

「どうしても？」

「はい。すいません。…三日後、学校もやめます」「えっ？」

いつのまにか教室の入口には、宮内部長・水野さん、斎北さんが立つていた。

「…先輩」

「学校もやめちまつのか？」

「…はい。残念ですが」

「ほんとに残念で悲しいわ」

「あや子さん、…まだ、三日もあります。遊びに行きますよ」

行けないかもしね。それよりも、学校にさえ来れないかもしない。

裏国内部の調査が、スムーズにいけば来れるけど。

「裕希ちゃん」

水野さんが近寄ってきた。

「はい、何ですか？」

「いろいろな意味を込めて、頑張ってね。それから、探偵部のメンバーとして、裕希ちゃんの記録をちゃんと残しておくよ」

「ありがとうございます。とても嬉しいです」

「手紙、ちょうどいいね」

手を握つたまま、あや子が言った。

「俺達にもな」

いつのまにか全員、私の周りに来ていた。

「もちろんです」

たつた、数日しか経っていないのに、こんなにも私のことを想つてくれている、言葉に出す優しさより、言葉に出さない優しさを人より持っている人達。

：同じものを持っている人物を、私は知っていた。

昔の事だけど。

：不思議に、この人達といると心が安らぐ。

唯一、私、江藤裕希に戻れる場所。

「短い間でしたけど、先輩達に出会つて本当に良かつたです。ありがとうございました」

裕希は、今までで一番最高の笑みを浮かべた。

もし、自分を見失いそうになつたとき、もつ帰ることはできないけど、この人達の事を思い出そつ。ただの十六才の少女に戻させてくれる、この人達のことを…

一と、思う裕希だつた。

先輩達に家まで送つもらつた。

「…さて、気合いを入れて敵陣に乗り込みますか」

一と、その前に、最後に寄っていくかな。  
「……いるかどうか、わからないけど」「

午後八時。

スーツに着替える。

ケースには、予備の銃と弾。そして、時限爆弾…三つ。  
愛用のリボルバーは、脇にセットしてある。  
このケースは途中で隠していく。とりあえず下調べの段階だ。  
総頭に、気づかれないようにしなければ。

「……行くか」

「コツコツコツ…。

「……」

裕希は店の前にいた。

店の名は「HELP」…。

キイー…。

扉を開け中へ入り、カウンターへ向かう。

「……」

サングラスはしている。

カウンターが見えた。

黒木は…いた…。

コツ…。

裕希は足を止めた。

黒木はこちらに気付き、顔をあげながら言った。だがその言葉は  
最後まで言われなかつた。

「いらっしゃい…」

黒木の動きが止まる。

コツ…、コツ。

裕希はカウンターの前に座る。

サングラスは取らない。

「…相変わらず、カウンターには誰も座らないようだね」

「…今日は、髪を下ろしているのですね」

「ウォッカを一杯くれない？」

「…わかりました」

黒木は後ろを向き作っている。その後ろ姿を裕希は見つめている。  
そして…。

「総頭と契約をした。…というより、これから返事をしに行くのだが  
が」

黒木の動きが止まる。

「そう…、ですか…」

心なしか、声が震えている。  
ウォッカを裕希の前に置く。

「…」

黒木は何も言わない。

裕希はウォッカを一口飲んだ。

「…」しおりさま

お金を置き、席を立つた。

去る途中、後ろを向いたまま言った。

「…寺島という人は、私の性格をよく知っていた。会つたら伝えて  
ほしい、最後の契約者が貴方で良かつたと」

キイー…。

「ツコツコツコツコツコツ…」

足音が遠ざかっていく。

「…」

あの人気が、総頭と契約。

「…会つたら伝えてほしい、最後の契約者が貴方で…」

最後の契約者？

…最後…

「…！」

まさか…。

黒木の頭に、裕希の言葉が蘇る。

『私は、誰とも組む気はない。…寺島という人は、私の性格をよく知っている』

「…貴女は、組織をつぶして死ぬおつもりですか…」

黒木は、裕希の考えがわかつても、追おうとはしなかった。いや、追いたくても追えないのだ。なぜなら、そのことを裕希が望んでいないことを、一番よく知っているからだ。

「またお会いできることを、願っています」

だが、この願いが叶うことなどないと知っていても、願わずにはいられなかつた。

ケースはとりあえず隠し、総頭に会つ。

「…失礼。総頭と会う約束をしている。取り次いでもらいたい」

「しばらくお待ち下さい。あなた様のお名前は?」

「…カーリー」

門番が総頭に取り次いでいる間、監視カメラに気づかれないように、小型通信機を壁に飛ばす。

「お待たせしました。総頭がお会いするそうです。こちらの道を真っ直ぐ行きますと、案内人がいます」

門が開く。

「ありがとう」

言われた通りの道を行く。この間も周辺のチェックをする。人はいないが、木に隠れて監視カメラが設置されている。  
しばらく行くと、扉のところに女の人立っている。

「私がご案内いたします。どうぞこちらです」  
ピッピッピッ。

暗証番号…か

部外者にはわからなくなつてゐる。

FBIのと同じだ……。

ウイーン。

扉が開き中へ入る。

それからいくつもの扉があり、暗証番号を入力していく。違う番号に見えるが、同じだ。

「ここは、直接総頭の部屋に通じているのか？」

一つの質問をする。

「そうです」

女は、今までで一番大きい扉の前で止まつた。どうやら着いたらしい。ここまで来るのに七分。

女はボタンを押す、

「総頭、カーリー様をお連れいたしました」

と言つた。

すると、扉が開いた。

ここに扉は、総頭だけが番号を知つてゐるようだな。  
「入りなさい」

「……」

カーリーが中へ入ると、女は戻つていつた。

総頭とは距離をおく。

「答えを聞かせてもらおつか」

「……答へはYESTだ。だが、前にも言つた通り私は命令されるのは嫌いだ」

「わかつてゐる。ここに出入りするのは自由だがここのこととはシーケレットだ。ここは中枢部だ。気をつけたまえ」

「わかつた」

「私の知りたかったことを教えてくれたね。それだけ分かれば充分だ。」

「とりあえず今は、君に頼むほどの仕事はない。ああそれから、明日といつても、もうすぐ日付は変わるが、明日明後日と、幹部会を開く

……！

「……そ、うか」

「まあ、いいな……予定が狂った。

仕方がない。夜が明けないうちに仕掛けるか。  
ケースを取りに行かなればならないな。

「総頭、荷物を取りに行つてもいいか」

「かまわんが、私は会議の打合せに行く。戻つたら、私が戻るまで  
ここを出るなよ」

「命令されるのは嫌いだと言つたはずだが」

「ああスマナイ。ついいつもの癖でな」

フンッ。どうだか。

午前一時、クラブ・ヘルプ。

「店長どうかしたんですか？ 風色悪いですよ」

バイト中の宮内が聞く。

「あ、ああ、何でもない」

「そうですか？ 何か心配」とでも  
心配……

「……、悪い宮内、ちょっとここに頼む」

「はい」

私にどうこうできるものではないことはわかつていっても、やはり  
貴女を失うことはできない。

失いそうになつて初めて気付いた。

「今度ばかりは、自分の気持ちに従います  
店を閉め、裕希を追う。

## 裏国

ケースを隠してある場所まで戻る。そう遠くはない。

特殊技工をほどこしてあるレイバンに変える、暗証番号が見えるようになっている。簡単にいえば、指紋が浮かび上がつて見えるとということだ。

ケースを持ち戻る。

暗証番号を解いていく。ついでに、爆弾を仕掛けしていく。この通路は、先ほどの女しか通れないようだ。監視カメラがない、何かあつたときは、その女が犯人だとわかるからだ。

通路に仕掛けが終わり、あとは総頭の部屋だけだ。

爆破時間はちょうど三時間後の明朝六時。

組織壊滅が目的だが、まあ、機能不能になればいいか。中枢部がやられれば、連動してほかの部分が爆破しだすだろう。よしッ。セット完了。

爆破ぎりぎりまで部屋にいなければならない。

窓から外を眺めていると、総頭が戻ってきた。一人だ。

総頭は、机に組込まれているキーを押した。スクリーンに映し出されたのは、ある一室、その部屋には人が八人いる。

「この部屋は、今君が見ていた所だ。この八人は幹部の者達だ」

「ずいぶん早いな。

「早い集まりだな、まだ夜中の四時だというのに」

「ああ。時間を早めたんだ。実はこれから会議に行くが、悪いが、少し待つていてもらいたい」

「時間は？」

「二時間」

「六時…。

「……いいだろ？」「

……あれから一時間半…。

午前五時四十五分。

爆破まで十五分。

「……」

死ぬかもしない。

「……フツ」

なにを今更ら、もともと死ぬ気だつたじやないか……。  
奴らと心中するのは嫌だけど。

五分前 …

ドオーナンッ！

外を眺めていると、いきなり爆発音がした。  
なんだつ？

「まだ時間じやない」

いつたい誰が？。

ウイーンッ。

ハツ。

「……総頭……いつたい何事」

「見ての通りだ。どうやら犯人は黒木のようだ  
え？」

「残念です」

「くろ……き……？」

カチッ。

時計の針が六時を指した。

ドオーナンッ！

最初に仕掛けた爆弾が爆発した。  
もうすぐここの中つも爆発する。  
カーリーは覚悟を決めた。

「……」

ピーッピーッ。

総頭が無線を取る。

「今度はどこだ」

「...」こだよ「

総頭の動きが止まる。そして、カーリーを見る。

「...まさか、キサマ...」

総頭の顔に、怒りの色が浮かんだ。

ドオオオンツ、 次々と爆発している。

「その通り...、 最初に言つたはずだ、私は一人でやると。だけど  
考えが変わったんだ」

「死ぬつもりか」

クスツ。

カーリーが目をつぶり...。

ドオーンツ。音が近づいた。

「...あとはここだけだ。逃げ場はもうない」

ハツハツハツ。

「たいした奴だ。貴女のことを見つめなかつた私の責任です。私の負  
けです」

「裕希さんつ！裕希さんど...」ですつ

ウツ。

火がまわつていて、先に進めない。この通路を爆破したのか...。

あの人は本当に。

「貴女のことなど、わからたくなかつた」

残りは中枢部。

そう思つて向かおうとしたとき、

ドオーンツ！

今までで一番大きい爆発...。

それは中枢部からだつた。

黒木は、よろめきながらも火をくぐり、なにもかも吹き飛んだ中 枢部の前に立ちつくす。

「…ゆうき…」

黒木はそれしか言えなかつた。

カラ…

ふと、音がする。

「…くろ…きか…」

人がつ！

「裕希、裕希さんっ」

黒木が駆け寄る。だが…、声の主は…

「…総頭…」

黒木は愕然とする。

「そう…、ガツカリするな、ほら…」

そう言いながら、総頭は横にずれた。

そこには、気を失つて倒れている、裕希の姿があつた。

黒希がそつと触れる。

「…裕希さん」

「安心…しろ。気を失つている…だけだ」

どうやら裕希を庇つたらしい、そのせいで総頭は傷だらけだ。

「早く連れていけ。人が集まる」

「しかし…」

「早く行けッ。安心しろ、今後、彼女には手は出さない。本当だ。

私もミイラになつたようだ」

壁に寄りかかりながら言つた。

「…総頭」

総頭はニッと笑つて、早く行けと促した。

黒木は裕希を抱き上げて、

「ありがとうございます」

と言つて去つた。

## 第4章・依頼・

とある一室、一人の男が話している。

「君に頼みたいことがある。この者を始末して貰いたい」  
ある男がそう言った。

そして、ある男はその写真を取り言つた。「カーリー」と  
「やつてくれるな、君にならできるだろう、カーリーと一・一を争  
う、ほぼ互角の君なら、シリコウよ」  
「わかつた」

……体が重い…

ああ、そういうえば。私は、痛みを感じるところとは、私は生  
きているのか…。  
体が動かない。『裕希』誰かが呼んでいる。

懐かしい声のような気がする。

「裕希」

誰だろう。重いまぶたを開く

「……」「

「…裕希…」

目に入った人物は、安堵の色を浮かべている。

「黒木…」

「はい」

「…勝手に名を呼ぶな」

「はい…」

クスクスクス。黒木が笑う

「何がおかしい」

「いえ、『ご無事でなによりです』

無事…。そう。

「黒木」

裕希は起きあがる。

「はい」「

「なぜ私を助けた。なぜ私は生きている

「はい」「

黒木は黙っている。

「答えなさい黒木」

話そうとしない。

「……總頭はどうした。私が生きているのなら生きているだろ。……

……そう だ、あいつは、總頭は、私より怪我が酷いはずだ。そうだな？」

「そう、思い出した。」

「……はい、その通りです。貴女は、總頭に庇われていました

「……」

ちつ……。

裕希は、總頭に助けられたことが気にくわない。しかし、本意ではないにしろ、助けられたことは確か。

「今何時……」

「十一時半です。どこへ

「学校に行く」

「そんな体で?」

「たいしたことない」

ベッドから起き上がり、いったん家に帰る支度をする。フウッ。ため息をつく。

「黒木、とりあえず礼は言つておく」

午後一時三十分。  
職員室に行く。

「先生」

「おっ。江藤来たな。大丈夫か？これ前中に配ったプリントな  
「はい。じゃ、失礼します」

「あつ、ちょっと待つた」

「？なんですか」

「校長が呼んでるからすぐに行つてくれ。授業のほうはいいから  
「はあ…」

「ガラガラ。ぴしゃん。

「……」

なぜ校長が私を…。面識もないのに。  
…よくわからないが、行くしかないか。

コンコン、校長室のドアを叩く。

「一年E組の江藤です。失礼します」

そう言い、中に入り、校長の顔を見たとき、裕希は息をのんだ。

「…きさま…」

「待つっていたよ。江藤君」

「いつたいどうこうことだ。なぜ貴様がここにいる、総頭」「  
「そう睨むな、ここは校長と親戚でな、急きょ頼まれたんだ。いわ  
ゆる、代理だ」

「…、怪我のほうは丈夫なのか」

「おやつ、心配してくれるのですか？意外だが、嬉しいですね」  
「べつに、ただその怪我は私のせいだからな。それだけだ」  
誰が貴様の心配などするか。

「それよりも何の用だ」

総頭は、引き出しをあけ、一通の封筒を置いた。  
それは、私が出した退学届だった。

「…なんだ」

「貴女に手は出さない」

「何のことだ？」

「…黒木から聞いていないのか？」

「いや……」

黒木のやつ、この分じゃまだ何か隠しているな。

「用はそれだけか。では、失礼する」

裕希が去ろうとしたとき、総頭が言った。

「私の名は、東条院 秀之だ」

裕希も思い出した。

父親の死因を知りたかったのだ。

「私も聞きたいことがある、父の死因は何だ？」

東条院は答えない。その代わり、一通の封書を出した。

「洋一氏から預かつたものだ」

「……」

裕希は封筒を取り、部屋を出た。

三年の教室。

富内は、裕希が屋上へ行くのを見かけた。このとき、怪我をしていることに気づく。気になり、後を追おうとしたとき、顧問に呼び止められる。

「富内」

「先生、何です？」

「ああ、江藤裕希って子がいただろ？」

「はい、江藤さんがなにか

「実はな、退学が取り消しになつたんだ」

「……ほんとですか？」

「ああ、それでな、彼女に会つたら部に戻るか聞いといてくれ」「わかりました」

裕希は、屋上で手紙を読んでいる。

『愛する娘 裕希へ

この手紙を読んでいるといつことば、東条院と会つたのだな。ハツキリ言つて、どう話したらいいのか私には分からぬ。東条院から初めてお前のことを聞かされたとき、正直言つてショックだった

よ、同時に悲しかった。けど、お前を責めることは私にはできない。お前を騙していたことにはかわりはない。私は、お前から逃げていった。どう接したらいいのかわからなかったのだ、手紙を書くのも迷つた。なぜお前が、暗殺者をしているのか、そうなつてしまつた理由を知りたい。

「ゆっくりと、お前と話がしたい。もう一度、お前をこの腕に抱きしめたい」

「……」

「ポタッ……。」

「うつ……。涙がこぼれる。」

「グシャリ……。手紙握りしめて声を殺して泣いている裕希の姿を、富内は、声をかけずに去つた

屋上にいる裕希の姿を、あるビルの屋上からシリコウが見ている。「あのカーリーが学生だったとはな、意外だったな」

裕希は視線を感じ、その方向を見る。

数秒、じつと見つめ合つが、シリコウが目を離す。

「……なんだつたんだ」

殺氣を感じなかつたので、気にして下に降りる。

「さすがだな、ただの視線でも気づくのか

と、シリコウは呟いた。

裕希は保健室に行く、黒木に一時ぐらいで包帯を換えるように言われたのだ。

「ガチャッ。」

「先生、包帯と消毒液下さい」

「んー? どうかしたのか」

「いえ、医者に時間がきたら換えるよう言われたので

「そか、ちょっと待つてな」

保健医は椅子から立つて、包帯と消毒液を出して裕希に渡した。

「……?」

勝手に私がやつていいのか？

「悪いな、これから行かなきゃならないところがあるんだ、すぐ戻つてくるから留守番頼むな」

「はあ……」

そう言つて保健医は出ていってしまった。

なんだかな いいのか生徒にまかして、よくわからんやつだ。  
まあ、私にとつては都合がいいが。

「……よ、いて……」

制服を脱ぎ、傷口を消毒する。

「……」

傷を見て

「……無様だな」

と呟いた。

包帯も換え終わつたころ、斎北が入つてきた。

「先輩…どうしたんですか？ 怪我したなんですか？」

斎北は手を切つていた。

「ああ、先生は」

「今出でます。留守番頼まれたんです。私が手当しますから、ここに座つて下さい」

消毒液はあるので、ガーゼと新しい包帯を棚から出す。

「ちよつと深いですね。いつたい何したんですか？ とつあえず止血だけしちりますね」

「ありがとう……」

それ以上何も言わない、何か言いたそつのはわかつた。

「なんですか？」

「その怪我、どうしたんだ？」

「……たいしたことありません。心配しないで下わこ  
まづいときに会つちやつたね。」

「退学取り消しになつたんだつてな、部のまつばざつするんだ？」

「……まだ、わかりません。すみません」

「あやまる」とはない

ガチャヤツ。

「おや、客が増えてるな、悪い悪い」

保健医が帰ってきた。

保健医は斎北の傷の具合を見て言った。

「こりゃ医者に行つたほうがいいな。斎北、担任にはいつでもおくから帰つていいぞ。あと江藤もだ、校長が傷に障るから帰るよつこと言つていた」

「…はい」

よけいなことを…。

いつたい何のつもりなんだ。なにを企んでるんだ。

「裕希ちゃん、今の校長と知り合いなのか？」

ほり、面倒なことになつたではないか。

「…まあ」

不本意だが、怪しまれると困るからな。

それより、

「先生は校長先生のところに行つっていたんですか？」

「ああ、今月の報告書を渡してきたんだ」

この男信用できないな、なぜ私のことを知つてている。呑のつていないのに、私のカルテはないはずだ。

アイツの犬か…？

そうか、あたり前か。あいつは裏国の総頭だつたな。

「じゃ、裕希ちゃん、一緒に帰ろうぜ」

「はい」

黒木のところに行つてみるか。

「先輩、ヘルプに行くんで」「…」

「どうか？」

「一人で平気か」

「平気ですよ。意外と心配性ですね、斎北先輩は」

！」

クスクスクス。

ほんとに、そんなことを言うのは、知らないとはいって、黒木と貴方たちだけですよ。まったく。

「人による

「……！」

「 puff 。

「あははははっ！」

「なにがおかしいんだ？」

「くすつ いえ。やつぱり似たもの同士だなあとthoughtして」

「誰と誰が」

「斎北先輩と宮内部長」

「健悟と？ なんでだ」

「同じ」と言うんですから

「……あつ……」

クスクス。

「人のこと言えませんね。先輩？」

「気を付けて帰れよ、じゃあな」

「はい、ありがとうございます」

斎北は、少し赤ら顔で病院に向かつて行つた。

くすくす。まいつたなあ、どんどん違う顔が見えてきちゃつて、突き放そうにも突き放せないじゃないか。

「……まいつたな

キイー。

「いらっしゃいませー」

店員の声が響く。

「お席のほうは」

「カウンターに行きますので」

「はい」

まだ二時頃なので客はいるが、仕事の「じじやない」の意味にしない。

カウンターに座る。

直接黒木に注文する。制服なので酒は飲まない。

「アト、グラスを置く。

「どうしたんですか？」「こんなに早く」

「東条院に無理やり帰らせられたんだ」

「え？ どういうことですか？」

「こっちが聞きたいよ、奴は、親戚の代理だと言っているがな、まあ、これはホントだろうな。黒木は何も聞いていないのか？」

「いえ何も。どういうつもりなんでしょうか？」

「さあね、それより…戻らなくていいのか？」

「…戻れと言われるまで戻る気はありません」

「…そうか」

裕希は分かつていた、東条院は黒木を放さないと、このことは黒木には言わない。黒木もわかっているだろう。

店がクラブに変わる時間がきたので、帰ることにする。しばらくして仕事はしない。

「じゃあね」

店を出る。

このとき畠内と会つ。どうやらバイトの田だつたよつだ。

今日は運が悪いな。

「今晚は部長。これからバイトですか？」

「ああ」

「頑張つて下さい。じゃ、失礼します」

軽く言葉を交わして去る。

店に入った宮内は、黒木に言った。

「今の子と、お知りあいなんですか？」

「ああ、君の後輩なんだって？」

「はい。可愛い後輩です。でも、最近元気がないのが気になるんで

すが、店長は何か聞いてませんか？」

「いや」

「やうですか」

「……」

黒木は、裕希をこのままあの高校においておくのは危ないかもしれないと思つていた。

家に入ろうとした裕希は、またあの視線を感じた。

「……」

「この間は氣にしなかつたが、一度も感じるところとは、明らかに私をつけている。殺氣は同じく感じないのだが。ハツキリと断定できないが、何となくわかった。黒木には知らせない。

早朝、東条院のところに行く。

「東条院っ。私のことは本当に誰も知らないのか」

東条院は、いきなり入ってきた裕希に驚くが、椅子に座る。

「そうだが。なにがあつたのか？」

「昨日からつけられている、殺氣はないが」

「黒木には言つたのか？」

「いや」

「なぜだ」

「言つ必要もないだらう、これは私の問題だ」

「ならばなぜ私に言いに来た」

「勘違いしてもらつては困る。お前達のほうが要素が多いからだ」

「ふむ、断言しよう、私はそんな命令を出してはいない」

「…どうか」

「こいつの口は、嘘を言つていない。とすると誰だ？」

考え込んでいると、東条院が言つた。

「調べるか？」

「いや、そんな必要はない、無用だ。待っていれば向こうから仕

掛けてくる。それを待つ

「無茶はするな」

「…なぜ私にこだわる」

「君を失うわけにはいかないと言つたはずだ。それと、洋一氏から君のことを頼まれているからな」

父さんが…。

裕希は驚きを隠せない。

「変に誤解しないでほしい、洋一氏に頼まれたから生かしているのではない、私が君を気に入つたからだ。バカバカしい話だろ？」

フツと、裕希は笑い、

「だな」

と言つた。

そして

「依頼をしたのが、裏国の者だつたら知らせるよ

そう言つて出て行つた。

屋上に行く。

「…足を洗つもつだつたけど、じばらくは無理そうだ  
ハツ…。

「江藤さん」

不意に、誰かに声をかけられる。

振り返ると、この間部室に来て映画がどうのと言つていた人だ。

「なにか？」

「実は君にも出て欲しいんだ、この映画」「

はあ？

「あの、私、部は辞めたんですけど」

「そんなの関係ない」

「でも、困ります」

そう言つているのにもかかわらず、先輩は、無理矢理台本を裕希

に押しつけ、

「アロシク」

と黙つて、行つてしまつた。

「.....」

裕希は呆気に取られて言葉が出ない。

「な…なんなのいつたい」

なんて無責任なヤツだ。

「.....！」

視線。またあの視線だ。

視線の先を見る。

「頭にきた」。

「いい加減にしないか、かかつてくるなひをつとかかつてこいつと、思わず言つてしまつた。

いかんいかん、こじは学校だ。

「しかし、困つたな」

裕希は下に降りた。

ビルから見ていたシリウ

「お言葉に甘えて、からせてもらひ」

授業中、誰かが何だあれと言つた。

最初、裕希は気にしなかつたが、皆が騒ぎ始めたので外を見る。

「なんて書いてあるんだ？」

「K・I・I・L・」、by DG・なにこれ

「.....」

K・I・I・L・、by DG……。殺す、DGより。DR、ドリゴン。ドラゴン＝シリウ。私と同じ暗殺者だ。コードネームはシリウだがドラゴンが正式の名だ、こじのこじを知つてゐる者はいない。私がなぜ知つてゐるのか？

邪の道はへびつてね。

しかし、噂は本当のようだな。予告を出すところのは

「変わつてるわ」

「ホンとよね、何だと思つ? 裕希

「えつ? ああ、何だうね」

まあ、思わず声に出してしまつた。

「.....」

## 第5章・シリコウ・

放課後、帰らうとしたとき、毎回の先輩に見つかってしまい、連れて行かれる。

「あの、どこへ行くんですか？」困ります」

「まあまあ、すぐ終わるから」

そう言って連れて来られた場所は、裏庭だった。  
そこには、斎北がいた。

「斎北先輩っ！」

「よう、裕希ちゃんも頼まれたのか？」

「頼まれたんじゃありません、無理矢理連れて来られたんです！」ほんとに何とかして。

「まつまつ。とつあえずここ読んでみて」「

もお…。それどころじゃないのに。」

そういういつも台本を読んでみると、

「…、あ、の…これ、もしかして」

「どう？　いいだろ？　アサシンの話しだ」

カンベンしてよ…。

「…あや子さんのほうが似合つてると感つんですけど」

「いや、あや子だとダメなんだ、君のイメージにぴったりなんだ、頼むよ」

「……」

「…。どうして、いつもタイミングが悪いんだ。まいつたな。

仕方なしに返事をしようとしたとき、保健医が来た。

「西岡、それ、少し待つてやつてほしいんだ」

「先生、どうしてですか」

保健医は、ちらりと裕希を見る。裕希は横を向く。

「江藤は怪我をしているんだ。良くなるまで待つてくれないか？」

「おれもそうしてもらいたい。ダメか？」

斎北が言った。

西岡は少し考え

「わかった、いいですよ。ただし四日だけです。」  
「いつも期限があるんで」

そう言って西岡は、帰つていった。

「悪いな裕希ちゃん、あいつちちよつと強引だけど悪い奴じゃないから」

斎北がすまなそつに言つた。

「……いいですよ、気にしてませんから。それより、傷のほつは大丈夫なんですか？」

「ああ、8針縫つた

「うわっ」

「そういうえば、一度も縫つたことないな。

「ほら、斎北部活だる」

「あ、じゃあな裕希ちゃん」

「はい」

斎北の姿が見えなくなつた。

「……よくここがわかりましたね、先生」

「ああ、私も帰るところだったんだ、そしたら、君が連れていかれるのを見たんだな」

「そうですか」

よく言つ、見張つていたんだろうが、東条院に頼まれたんだな。  
まったく余計なことを、私が誰だか、忘れていいようだな。

「途中まで一緒に帰るか」

「いいですよ」

「先生はうちの学校長いんですか？」

「んー、二年位かな。江藤はもう慣れたか」

「まだ一ヶ月位ですからねえ、まあまあって感じですか」

必要以上に、馴れ合う気はないからね。

「斎北と知り合いなのか？　ずいぶんと親しげだつたけど」「部活の先輩です。私、部はやめたんですけど、いろいろかまつてくれるんです…」

「人は見かけによらないからな、あいつらは人気はあるが、近寄りがたいつてみんな言つてる。実際はどうだ？」

「良い人達ですよ。ちょっと心配性ですけどね」

ふつと笑う。

「良い顔だ」

「え？」

「良い顔だつて言つたんだ。あいつらの話してるときの君の顔」  
保健医はニッと笑う。

「……」

気づかなかつた…裕希は愕然とする。

そんな顔をしていたのか…、自分でも気づかぬうちに。

「どうかしたのか？」

黙り込んでしまつた裕希に、保健医が話しかける。

「…いえ、ちょっと驚いただけです。そんなこと言われたの初めてなので」

「そうか、あつ、じゃあここでな。気をつけて帰れよ」

「　はい」

…不覚、気づかなかつたとはいえ、よりもよつてアイツの手のものに見られるとは。  
やつぱり、離れるべきだな。

「総頭」

「神か」

「はい」

「どうだ様子は」

「はい、これといつて…」

「なんだ？」

「本当にあの子なんでしょうか、噂とは少し  
どうやら、総頭と話をしている人物は保健医のようだ。名を榎と  
いづりしき。

裕希と別れたあと、報告しに来たようだ。

「噂ほどあてにならないものはない。意外な一面を見たのか？」

「はあ ああいう顔をするとは思つてもいませんでしたので、私が  
言つたら、本人も自覚していなかつたようだ。あれではまるで」

「まるで普通の高校生か？」

「はい」

「油断はするな、なぜカーリーと呼ばれていると思つ。最初、名前  
はなかつたんだ、自然とそう呼ばれるようになつたんだ。この意味  
はわかるな？」

「はい」

「まあ、今回の争いで嫌でもわかるがな、敵に回したくない人物だ」

「……」

「総頭にここまで言わせるとは、本当の姿を見てみたい

家に戻つた裕希は、いつでも出られるよつて仕事用の服に着替える。

いつ仕掛けてくるのか見当がつかない。シリコウのデータはまつ  
たくないからな。

「さて、どうするか」

たしか、組織の人間だったよな。名簿に乗つているはず、組織の  
端末に侵入してみるか。

裕希は、一階にあるパソコンのところに行く。  
銃は脇にしまつてある。

カタカタ……

『コードネーム・シリコウの記録を示せ』

『・・うまくいくか

ピピッカタカタカタ…。

『特殊コードX。ネーム・シリウ。仕事に関するデータは、本人の希望により入力されていない』

「……おやおや、シリウにも信用されていないようだな。当たり前か、こんなにも簡単に情報が見れるのだから」

「仕方ないな、写真でもいいから一度見てみなければ、顔を見れば大概どんな奴かわかる。」

ピンポーン。

午後七時。

インターホンが鳴った。

「……」

「誰だろこんな時間にっていってもまだ七時だけど。  
下に降りる。」

「はい、どちら様ですか？」

「私、あや子よ」

「あや子さん？」

スコープから除くと、本當だ、あや子さんが立っていた。

ガチャヤ。

扉を開ける。

「あや子さん。どうしたんですか？ 何かあつたんですか？」

「ううん、夕飯に誘いに来たのだけど、どこか行くところだった？」

「いえ別に大丈夫ですけど」

「ほんと？ よかつた」

「あ、じゃあ、ちょっと待つてください」

裕希は一階に上がり、パソコンからフロッピーを取り出し、ほかなり必要なフロッピーも取り出して、バックに入れた。

まつ、念のためね。

「じゃ、行きましょうか」

行く先は『HELP』。

今は夜だからクラブになつてゐる。

それにしても、これからH.E.L.P.に行くことが多くなりそつだな  
と、思う裕希だった。

アクセス場所を変えよつか…。

「カウンターにしましょつか」

「いいですよ」

行つてみると、富内部長がいた。もちろん黒木も。

「やあ裕希ちゃん、いらっしゃい」

「今晚は、今日バイトだつたんですね」

「ああ、何にする？ 何でもいいよ」

「裕希ちゃん、お酒大丈夫？」

「はい、平氣です」

聞くだけ野暮だ。

「じゃあ私は、マスターのおすすめ。裕希ちゃんは？」

「いつ」

「ん？ なに」

「色々あるなあ、つて」

危ない危ない。ついいつもの癖で、いつものつて言つてしまつと  
ころだつた。

「このカクテルはどう？」

と、黒木が言った。

それは、いつものカクテルだつた。

「…それになります」

「…」口つして言つた。

黒木に「寧語を使ったの初めてだ。これからは、使う機会が多くなるだろうな、と思う裕希だった。

飲みながら話をする。

「…裕希ちゃん、部活はどうするの？」

「…まだ わかりません」

「そう」

本当は、戻るつもりはない。学校もやめるつもりだ。

今回の争いが終わったら、何もかも精算するつもりなのだ。

郊外の高校にするか、それとも海外へ行くか迷っている。東条院が何と言おうと、学校はやめる。

黒木に言おうか言つまいか、まだわからない。

それに…、父の死因を調べなければならない。教えてはくれないからね。

考え込んでいると、映画の話になっていた。

「ほんとに、アイツには参ったよな」

「いつもこきなりなんだもの。裕希ちゃんも災難よね」

「ほんとですよ、ちやんと断つたのに、あや子さん代わってくださいよ」

今はそれだけじゃないの。

「うーん、でも、いい記念だからやつてみたら?」

「そうだよ、やつてみらん」

「…記念で すか…」

「やつそつ

「うーん…。

「そ…うですね、いい記念になりますね」

「これが終わったら、辞めるつもりだったけど、まあ、いつか。

「あっ、そうだ。だったらテープもらえますかね」

内容的には違つけど、私がしてきたことの証拠として、残していくたい。

「ああ、くれると思つよ、言つておくよ」

「お願ひします」

「どういう映画なんです」

今まで黙つて聞いていた黒木が、口を開いた。

裕希はニッと笑つて、

「アサシンの話」

と、言つたら

「おやおや、合ってるんじゃないですか」

黒木は表情変えず言った。

クスッ。クスクスクスクス。

裕希と黒木が笑う。

「ちょっと小腹が空いたわね」

「じゃ、何か作ろう」

そう言つて宮内は裏に行つた。

「私も手伝うわ。マスターいいかしら」

「かまいませんよ」

あや子も裏へ行つた。

黒木と二人になつた。

裕希は、カクテルを飲み干した。

「お代りくれる？ それと、御代は私につけといて、勝手に下ろしていいわ。だからあなたの『ご』つと言つておいて」

「わかりました」

裕希の前にカクテルを置く。

裕希は、そのカクテルを見つめて言つた。

「…あなたに話がある…」

「何です？」

「いや…。おりをみて話す」

カクテルを飲む。

「お待たせー」

あや子たちが来た。サラダとチャーハンを作つてきた。

「いただきます」

それから数時間話し続けた。

午後十一時をまわつた。

「本当にいいんですか？」

「いいですよ。今日は私の『ご』りです」

「ごちそうさまです。裕希ちゃん送るわ」

「大丈夫です。あや子さんのほうこそ一人じゃ危ないですよ、遠い

いんですから、私が送ります

「そお？ ありがとう」

あや子を送ったあと、家に電話をかける。もちろん、誰もいるはずがない。

プルルルル・プルルルル・プルルルル

「……」

おかしい。

留守電が切れている……。

やはり。

フロッピーを持ってきて

「……正解……か」

家に戻った裕希、一見、異常のないよつて見えるが、裕希には分

かった。

パソコンへ向かう。

コンセットははめられている。

シリュウが来た。

パソコンにはフロッピーが入れてあった。

電源を入れ、リセットを押す。

ピピッ……ピ。

でてきたのは……

何やら、暗号文めいたものが出ってきた。

「……」

解くか解かないか……。解かないことにした。  
どこにも異常ないか確かめて眠りについた。

午前一時をまわっていた。

数日が過ぎ、映画の撮影が始まった。

傷もすっかり良くなつた。

四日間、シリュウは何もしてこなかつた。

「じゃあ始めよう」「う

中庭での撮影。ここでは、アサシンが狙われるシーンだ。ここでの最初のシーンは何者かに狙われるという設定だ。そして、犯人を見附けて、その雇い主を殺すという話だ。

本当に、今の私と同じだね。これだけ似てると西岡さん、あなたを疑ってしまいますよ。

本番になつて、裕希の横にある枝が折れた。

裕希が振り向く。

少しの沈黙。

「カートツ！」

西岡のオーケイが出る。

「良い表情だったよ」

「そうですか」

しかし、今のは本当の表情だ。

枝の折れるタイミングはバツチリだった。

：消音銃

枝は本当に折れる折れ方だった。

「……」

シリュウの腕は確かみたいだな。

どうやら、この映画のシナリオ通りになるのかもしない。

昨夜、一つだけなくなつていたものがあった、それは、この映画の台本だった。

次は、先輩たちのシーンなので、しばらく見物。

「面白いことをしているな

頭上で声がした。

振り向かなくともわかつた。東条院だ。

「つれないな。よく引き受けたな。下手をすればバレるだろ」

「ただの気まぐれだ。それに、昨夜この台本が盗まれた。意味が分かるか？」

「なるほど」

「丁度いい舞台になつた。」の映画とともに終わらせぬ、フジヒ  
笑つて言つた。

「いいのか」

と、東条院が問う。

裕希は少し黙つて、

「いいや、その時は私が消えればいいことだ

「…そうだな」

「ああ、そうそう。校医の名は何といふ？ 私の監視役をするのは  
いいが余計な真似はするな」と言っておけ」

「貴女の本気の姿を、見たそつた顔だつたな」

「本気ねえ。さあどうかな

そう言つて去つた。

「黒木には言わないのか？」

東条院の問いかけに裕希は、足を止め、

「…いざれ話す」

と、言つて去つた。

「貴女を、死なせるわけにはいかないのですよ  
裕希の去る後ろ姿を見つめながら、東条院が言つた。

「それじゃ、斎北と江藤さんのシーンいくよ」

アサシンであるのに斎北を好きになつてしまつ。斎北もアサシン

を好きになつてしまい、斎北が告白するシーンだ。

「…先輩のお気持ち嬉しいです。でも、すいません。私には応え  
ることができません」

「そうか、いきなり悪かつたね…じゃあ、友達でいてくれるかな。  
だめか？」

「いいえ、友達なら」

「ありがとう、それじゃあ

斎北が去つていく。

その後ろ姿を、悲しげに見つめながら、  
ポツリ…。

「ありがとうございます」と、呟いた。

たしかこのあと撃たれるんだったよな。

実際、本当に撃つてくれるだろうか、いや、撃つてこないだら、

奴も一様プロだ。少なくともまともな頭のはずだ。

思った通り、撃つてこなかつた。

今度は、裕希一人でパソコンを打つているところだ。

探偵部のパソコンを使う。

「江藤さん、これ打つて」

そう言われて渡された紙には、パスワードが記入されていた。

それを見た裕希は驚いた。

なぜなら、B・Bのパスワードだったからだ。

「…これ何ですか？」

と聞く。

「ああ適当に書いたやつ、それ打つたあと適当に打つてて」

「はい…」

「適当…。だつたら何も適当に打てって言えば済むことだらう」と  
偶然とは恐いものだな。。

しかし、これを打つわけにはいかない。

侵入して、一番バレやすいのは学校なのだ。

東条院がこの学校にいることは、側近だけが知つてることだらう。

う。 … 校長室に侵入する。

力タカタカタ…

『撮影でB・Bに侵入することになつたが、どうする』  
と、打つた。

すると、

『パスワードを変えて打つて』と返事が返ってきた。  
やつぱりね。

仕方ないな、自分のところにアクセスするか。

ピース

何かが反応した。

出てきたデータは……！

「……」

父親のデータだった。

どういづこと？父さんに関するデータは、持っていないはず。

ハツ！

まさか

シリュウが置いていったフロッピー。

次々とデータが出てくる。そして、ある一文字を見たとき、思わずスイッチを切ってしまった。見るのが、知るのが怖かつたのかもしれない。

「カット！」

西園の声で、我にかえった。

「どうしたの？」

「あ、すいません。つながつてしまつたので、ビックリして、まずかつたですか？」

「や大丈夫、バツチリだよ」

「よかつた」

「今日の撮影はこれで終わりだから、江藤さん帰つていいよ。『苦労さま』

「はい」

「あつ、そうだ。健悟から聞いたよ、オーケイだよ、出来上がったらテープあげるよ」

「ありがとうございます。それじゃ失礼します」

「ああ、バイバイ

「パタン……」

「あのとき……」

あのとき出た一文字それは、『死』だった。

「……」

私は、父の死因が知りたいと思っている反面、知りたくないと思つてゐるのかもしれない……。

## 第6章・死因・

撮影が終わって、家に帰る途中、誰かにつけられたのに気がつく。

気配の主がわからない。

何でもかんでも、シリウの所為にするわけにもいかない。  
それに、筋書きではここでシリウは出てこない。

「……」

角を曲がり待ち伏せをした。

すると、向こうも角を曲がらず裕希と同じ行動をとった。  
「！」

「こいつ 頭の回る奴だ…。しかし、私には今武器がない。

「…何者だ」

「自己紹介をしておいつと…」

そう言つた瞬間、

バ！

「…！」

…裕希の喉元に光るナイフ。

「思いましてね」

一ツ口つして、その者は顔を出した。

「…すいぶんな挨拶だね」

ナイフをあてられても裕希は微動だにしない。

「俺はシリウ、よろしく」

「ああ、アンタがあのふざけた予告を出した本人か

「俺も、あんたが学生だったとは思わなかつたよ」

「…無駄だと思うが、お前を雇つたのは誰だ」

「さあな、…そうだな、一つ言つなら、『復習』だな  
なに…。」

「復讐だと？」

「……流石だな、ナイフを突きつけられても微動だにしないのは、

まつ、そりでなきや、この仕事はやつてらんないからな」

「 いざれ、お前には礼をせねばならんな」

「 礼?」

そすシリコウが聞き返すが、裕希は応えない。代わりに、「去ね」と、言つた。

シリコウは、ナイフをしまい、

「シーン20が楽しみだ」

と言つて去つた。

「 ……」

シーン20?

シーン20は、何だつただろう。

家に帰つた裕希は、シーン20について、斎北に電話した。

「すいません先輩、突然電話して」

「いや、かまわないよ。どうしたんだ?」

「実は映画のシーン20って、何でしたつけ

「シーン20?」

「はい。台本を無くしてしまいました

「ちょっと待つてな……」

何やら「ゴソゴソ」とペラペラめぐる音が聞こえる。

「 20 は、殺し屋と争う場面になつてるぞ」

「 そうですか、わかりました。ありがとうございました」

「いや」

「それじゃ、失礼します」

「ああ、また学校でな」

ガチャ……。

電話を切つた。

……、殺し屋と争う、か。

そういうえば、殺し屋は、誰だか書いていないな。

『……楽しみだ……』

あの言葉

「……まさか……な」

椅子に腰かける。

私の正体は誰も知らないはず。東条院達を抜かしてはシリュウに依頼した人物。

「……西岡に聞いてみるか」

明朝、西岡のところに行く。

「そういえば言つてなかつたね。叔父の知り合いなんだけどさ、以前この映画のシナリオを叔父に見せたところ、えらく気に入つてくれてさ、それで知り合いの竜さんを紹介してくれたんだ」「そうですか、どうもありがとうございました」

竜さんねえ……。

よくやるよ。

でも、これでシリュウを雇つた人物がわかつた。

先生か友達に聞けば、西岡の叔父が誰だかわかるか。

……しかし、どう言えば……。

「……しようがない、調べるしかないか。しかし何で調べよう普通人を調べるのには……。」

「……」

くう つ。

こうやつて考えていてもらちがあかないつ。

仕方ない、不本意だが、奴に聞こう。

そう言つて、裕希が向かつた先は、

バンッ！

「校長つ」

そう、東条院のいる校長室。

いきなり入つてきた裕希に驚きもせず、

「何だね、こんな早朝から」と、言った。

「普通人を調べるにはどうすればいい」

「普通人？ いつたい誰を調べるんだ？」

「……雇つた人物がわかつた。だが、名前がわからない」

「雇われたのは誰なんだ」

「……」

「どうする こいつに言つか…、だが

黙り込む裕希

そんな、裕希の心を察したのか、

「こんなことで、貴女に恩を売るつもりはない」と言った。

フウ。

「 そうだったな、雇われたのはシリュウだ。そして、雇つたのは二年E組、西岡敦の叔父だ」

「シリュウだと？」

「ああ。ふざけた奴つだがな」

「会つたのか」

「好きで会つたわけじゃない。向こうから來たんだ。それより、方法は」

「ああ、P・Bにアクセスするといい」

「P・B？」

「聞いたことがない。そんなものがあるのか。

「貴女が知らないのは当然だ、これは…と、説明するより試した方が早い。アクセスコードは、2B1 / X X . P・Bだ」

「…わかつた」

バタン。

校長室から出る。

「…水野さんのパソコンを借りるか

- 探偵部

力タカタカタ。

東条院から教えてもらつた、コードを打つ。

ピー・ピピピッ。

『 捜している人物名を入力してください』

と、出てきた。

カタカタカタ。

西岡敦といれる。

しばらくして、データが出てきた。

「 ……」

なるほど、いわゆる戸籍か。

「 ……」

西岡敦の叔父は……一人か。

名は、北村英夫。

こんな人物、私は知らない。しかし、シリュウを雇つたのはこいつだらう。

『 復讐』

「 ……」

ふと、なぜかそう頭に浮かんだ。

シリュウが置いていつたあのフロッピー。

もしかしたら、あれに何か載つているのかもしれない。この間は、動搖して読まなかつたから。

私としたことが、情けない。

カタカタカタ。

自分のパソコンにアクセスする。

ピピッ。

反応した。父さんのデータが出てきた。

「 ……」

『 江藤洋一。二十年前裏国に入国。入つてすぐに幹部の位置に就く、

その前に妻・小夜子と結婚。小夜子は、洋一が裏国の者だとは知らない。四年後、娘・裕希が生まれる。裕希十一才のとき、小夜子が病死。幹部だつた洋一は側近に位が上がる。側近は一人だつたが別に候補がいた。名は北村英夫、側近になつたのは洋一だつた。総頭と洋一は以前からの知り合いだった。裏国に率いれたのも総頭だ。妻、娘のことも総頭は知っていた。裕希十三才のとき総頭から娘がアサシンだということを知らされる』

「……」

十三才…。三年前。

そんな前から、父さんは知っていたの。

そういうえば、父さんが帰つてこなくなつたのは 三年前からだ…。力タ…。

続きを見る。

すると、『パスワード』と出てきた。

裕希は、『Y・E』と打つた。

なぜそう打つたのかわからない、ただなんとなくそう思ったのだ。当たつていた。

出てきたのは父さんの死因だつた。

『1991年。三月、江藤洋一死亡。死因、射殺』

「！」

な、に…。

射殺…。射殺だとつ！

バンッ！

机を叩き立ちあがる。

「なんで、父さんがつ、どうしてつ！」

叫ばずにはいられなかつた。

なぜ父さんが殺されなければいけないの。いつたい誰が。

「……なぜ、シリウが知つていいんだ…」

ブチッ。

パソコンのスイッチを消して、裕希は屋上に駆け上がつた。

そして。

ヒュー、パーーンッ！

迷いなく、信号弾を上げた。

学校は早退する。

今の裕希には、父親のことしか頭になかった。

家に戻ると、門の前にシリュウがいた。裕希はついて来いと、家中へ促した。バタン。

「シリュウ、ビニでこのトーナタを手に入れた」家中に入るそうそう、裕希は言った。「俺をその辺のアサシンと一緒にするな」どうだか。

「それは悪い。だがなぜ調べた」

裕希のそんな言葉に。

シリュウは、少し怪訝な顔をした。

「何を言っている？ 仕事の前に調べるのは当たり前だらつこいつ気でも狂ったか？」

調べるのは基本中の基本だぞ。

裕希の顔が怒りの顔に変わる。

「キサマが……、キサマが殺したのかつ」

「依頼を受けたからな。どんな依頼だろ」と俺は受けれる。アンタだつてそうだろう」「

裕希は、一步後ろに下がり。

手をギュッと握りしめた。

「お前を買い被りすぎていたようだ。お前が組織の人間だったことを忘れていた」と言つた。

「何が言いたい？」

シリュウの間に、裕希は答えない。

応えるつもりもなかつた。

「用は済んだ、帰るがいい」

キツイ眼差しで裕希は言つた。

「……」

ガチャ

パタン…。

シリュウは何も言わざ去つた。

「……」

……トン…ズルルル

壁にもたれかかる。

……ぼた…。

……。

「……だめだな……父さんのことになると感情的になつてしまひ……」

天井を仰ぐ。

涙が止まらない…。

「……父さん…」

『……どんな仕事でも…、アンタだつてそうだろ?』

「……」

シリュウ、お前とは決着をつける。

だがその前に、北村英夫、私はお前を許さないっ!

午後一時半過ぎ。

私服に着替えた裕希は、東条院のところへ学校に向かつた。懷に銃を忍ばせて。

チラチラと、私服で歩いている裕希を生徒達が見ている。目立つのは当たり前だ、私服は禁止されているからだ。裕希は気にしなかつた。先輩達に見られてもかまわなかつた。今は授業中だけど。

「裕希ちゃん」

歩いていると名を呼ばれた。

振り向かなくてもわかつた。久しぶりに聞く声だった。

「…水野先輩」

水野は手を振りながら近づいてくる。

「どうしたの？ 私服なんか着て」

「…校長先生に用があつて…。先輩こそ、今授業中ですよ」

「うん。ちょっと職員室に行つてたんだ」

「そうですか」

「なんか、話すの久しぶりだね。撮影のときはすれ違いばっかりだつたからね」

「そうですね。斎北先輩とは会つてますけどね」

「あや子が言つてた。貢が裕希ちゃんを一人占めしてゐるつてね」

「…！」

くす…クスクスクス。

「一人占めだなんて、あや子さんつたら」

「…それだけ、みんな好きなんだよ」

「！…先輩？」

「この間、あや子が言つてたんだ。君の様子がおかしいって

「…どうしてですか？」

水野先輩はちょっと躊躇つて、

「ヘルプに食事に行つたとき、何か、真剣な顔をしてマスターと話してたつて。マスターと君が知り合いなのは健悟から聞いて知つていたけど

「…まあいな、あのとき見られてたのか。

私と黒木が知り合いだというのも、以前、富内部長とすれ違つたときだな。

困つたな。

バレルのも、時間の問題かもしねない。

「…たいしたことじやないんですけど、心配してくれてありがとう

「」えこます。やつ、先輩、早く教室に戻らないと

「うん。元気出して裕希ちゃん。じゃ、また」

「はい」

水野先輩の姿が見えなくなつた。

…もし先輩達が、私の正体を知つてしまつたらどんな顔をするだろ？。

私が消えれば済むことだといつても、その時の人たちの顔を見るのが怖い。

怖い…、こんな風に思つよつになつてしまつたのも、の人たちの所為だな…。

「…やはり…部活など入るべきではなかつた」

「ンンン。

校長室のドアを叩く。

「どうぞ」

ガチャ…。

東条院は椅子に座つていた。

入つてきたのが裕希とわかつて、普段の東条院になつた。一体何が、普段なのかはわからないが。

警戒心が無くなつたとでも言おうか。

「私服など着てどうしたんだ。そういうえば、信吾弾を打つたのは貴女か？　いきなりどうしたんだ」

「ちょっとね。それより聞きたい」とがある

「何だね」

「父の死因は何だ」

「……、いきなりどうしたんだ」

「いいから応えろ」

「何かあつたのか？」

「応えない氣か。

つ。

「なんでも無い。邪魔したな  
ガチャツ。バタンつ。

校長室から出る。

「……」

裕希が出ていったドアを東条院はじっと見つめる。  
あんな格好してあんなことを聞かれたら、何かあったと言つてい  
るようなものだ。

雇つた主がわかつたようだな。

しかし、どうしてまた父親の死因など…。  
私が应えないと知つていて…。

西岡敦の叔父だったな…。

「調べてみるか」

東条院は横にあるパソコンに向かい、P・Bのコードを打つた。  
西岡敦と打ち。

出てきたデータを見た東条院の表情が怖張つた。

「北村英夫、だと」

裕希が向かつてゐる場所は、保健室。

東条院が应えないのなら、アイツ、榊に应えさせるまでだつ。  
ガラツ！

保健室のドアを勢いよく開けた。

いきなり開けられて、榊はビックリしている。

「なんだ、江藤か。ビックリした」

「聞きたいことがある」

カチツ。

そう言つて、ドアの鍵を閉めた。

「ん? 何だ? それより、西岡が探してたぞ」

「ああ、もう出られないと言つておいて下さい」

「なぜ?」

「出られないと言つたら出られないんだ、それより私の質問に应え

ろ

「江藤、先生に向かつてなんだその口の利き方は、それに

「芝居はよせ」

神が言い終わる前に、裕希が遮った。

神が怪訝な顔をする。

「…芝居？」

「そう、東条院秀之の側近、榎衛

机に腰かけながら裕希が言った。

「…何を言つているんだ。側近だつて？ なんだそれ

「フウ…。

裕希は溜息をつく。

「もうバレてるんだよ、東条院から聞いていいのか。まつ、聞いてても、シラを切るつもりだつたんだろうけど、これでもシラを切れるかな」

チャツ。

そう言つて、懷から出した銃を榎に向けた。

「…！」

「こういつのはあまり好きじゃないが、さあ、洗いざらい吐いてもらおうか

「…何が知りたい」

一瞬、気が乱れた榎だが、すぐに冷静を取り戻していた。  
さすがアイツの側近だけのことはある。と、裕希は、フツ、と笑

う。

「…江藤洋一の死因だ」

「江藤様の？」

江藤様…か。

「そうだ、死因はわかっている。なぜ殺されたのか、その原因が知りたい」

「…江藤様は、当初の頃から側近を務めていた。ある時期、ある人物の捜査をするようにと、総頭から命令された

「ある人物？」

「北村英夫という人物だ」

「で、その男は何をしたんだ」

「裏国内部にある噂が流れていた」

「噂？」

「北村は、当時幹部の一人だつたんだが、横領をしてるという噂だ。その時北村は、総頭にやつていないと言つた。だんだんと噂は消えていった。だが、総頭は知つていたんだ。でも、確たる証拠が無かつた。そこで、江藤様に内密に調べよと言つた。そして、調べていくうちに北村の企みが明らかになつた」

「どんな？」

「横領だけじゃなかつた。北村は裏組織の連中と手を組み裏国を乗つ取ろうとしていた。さつき、江藤様はずつと側近に務めていたと言つたが、ちょうどその頃、総頭の代が替わるころだつた、総頭が替われば側近も替わる。北村も側近候補だつた。だが、そのことは東条院様に伝わつっていた。当然北村は落ちた。そして、江藤様が側近に就いた。東条院様と江藤様は、古くからの親友だそうだ。しばらくして北村は追放された」

「……なるほど、北村は、自分の企みが失敗したのは、江藤洋一の所為だと、しかし、殺そうにも自分は裏国には入れない、そこで、アサシンを雇い、江藤洋一が一人になるのを待つて……殺した」

「そうだ」

「……」

馬鹿な奴の逆恨みで父さんは死んだ。

北村英夫という男の所為で……。

スツ。

裕希は、銃をしまつた。

それを見た榊は、

「なぜ、江藤様のことを

と聞いた。

裕希は、じつと、榎の顔を見た。

「……そつ……だな、素直に教えてくれた礼に言おうか」

一呼吸おいて、

「江藤洋一は、私の父親だ」

「……！」

悲しげに笑つて裕希は言った。

「……」

榎は驚きを隠せない。

「最後の質問だ、北村英夫はどうしている」

## 第7章・復讐かそれとも・

榎と裕希が話している頃、東条院は黒木と話していた。

「そつちに、裕希は行つていなか」

「いきなりどうしたんですね？」総頭

「お前、裕希に父親のことは言つていなか」

「言つわけありません。何か、あつたんですね」

裕希さんの身上。

「実はな……」

「そう言つて東条院はすべてを話した。

「……じゃあ、裕希さんは……」

「ああ、多分そうだろう、なんらかの形で父親のことを知つたんだ。多分裕希は、榎のところに行つて原因を聞き出すだろ。銃で脅してな」

「でも……」

「おそらく、北村のところに行く前に、お前のところに行くと思つうから、私が行くまで引き止めておけ」

「わかりました」

保健室。

榎はまだ混乱していた。

コンコン。

ガチャ。

入ってきたのは、

「総頭」

「その様子だと、やはり来たな」

「はい。あの 江藤様がカーリーの父親といつのは」

「話したのか……」

「その」とは後で話す。黒木の所へ行く、車を用意しない

「はい」

いつたん家に戻った裕希。

午後三時。

「……」

北村の家は、ここからだいぶ遠い。

途中までバイクで行くか。

念のため、予備の弾を持つていくか。

黒木のところに行つてから行くか。

仕事の前にお酒を一口飲んでいくのが、唯一の癖だった。

それが仇となることなど、このときの裕希には想像もつかない。

ヘルプに着くと、客はない。

まだこの時間だと、いつもなら客はいるのに。変だな。

カウンターには、ちゃんと黒木がいた。

裕希に気付いた黒木。

「……」んにちは、今日はどうしたんですか。仕事は入っていません  
よ

「……ちょっとね。それより、客がないじゃないか」

「はい。今日はもう閉めたんですね」

閉めた？ 珍しいな。

「なぜ？」

と、聞く。

「ちょっと、用事ができたんです」

「そう、でもちょっといい、話があるんだ

「シリコウのことですか？」

「……」

ハツとする裕希。

黒木の目をじっと見て

「…誰に聞いた…」

と聞く。

しかし、黒木は応えない。

「……東条院から電話があつたのだな。それで店を閉めたのか、まあ、いずれ話す気だつたから別に構わないが、…用というのは東条院に会いに行くのだろう?」

そう言って、裕希は去ろうとする。

「いいえ、貴女を引き止めておくよつ、言われました」

裕希の足が止まる。

「……」

囮られた!

裕希はそう思つた。

東条院は調べたのだ。シリュウの雇い主を。

北村のことを知つた。

私が北村を殺すと思つたのだ。

私が黒木のところに寄つていくことを知つていた。だから黒木に連絡して私を北村のところに行かせないために…。

ダッ。

裕希は入口に走り出した。

「裕希さんっ！」

黒木が追う。

カンカンカンンッ。

階段を駆け上がり、外に出たとき、

ハツ！

東条院の車が見えた。

「ちつ…」

バイクに乗つている時間はない。

裕希はそのまま走り出した。

「総頭つ！ カーリーが」

神が叫ぶ。

「わかつてゐる。神、お前は学校に戻れ。連絡があるまで動くな」

「わかりました」

ガチヤツ。

車から出て、神は学校へ戻つていった。  
車は、黒木の前で止まる。

「乗れ」

車は黒木を乗せ走り出した。

「総頭、すいません」

黒木が言った。

「……洋一に、もう一つ頼まれたことがある」

「江藤様に？ 何です」

「仇を取らせないでくれ、とな」

「……自分のために、手を汚させたくなかつたんですね

「……」

『「本当なのか、嘘じやないのか？ 秀之』

『「残念だが、本当だ』

『「裕希が…アサシンなんて。俺は、どうしたらいいんだ。一体、どうして、アサシンなんて』

『「理由は、本人に聞くしかないだろうな。何か深い事情があるのでろいづ』

『「もし、私が裏国人間だと知つたら…、あの子は…どんな顔をするだろう』

『「洋一』

ハアハア。

東条院達を撒くために、路地裏や狭い道を走つていく。

『「総頭、申し訳ありません。見失つてしましました』

『「仕方ない。黒木、お前は店に戻れ』

「わかりました。総頭はいかがいたします?」

「裕希の家に行く」

東条院達を撤いた裕希は、ビルの屋上にいた。  
学校にも店にも、家にもいられない…。そして、北村のところに行けない。

東条院は北村の暗殺を阻止するだらう。既に手をまわしているはずだ。

「……」

これからどうするか…。行くところがないとなると 新しい隠れ家を探すとしても、裏のルートでは買えないだらうから、表か、買えるだらうかこの歳で、だが奴のことだ調べあげるかもしれない。どうする…。

「……」

あのマンションに行ってみるか。

以前まで、隠れ家として使っていたマンションに。もう、奴の手がまわっていたら諦めよつ。

と、その前に、変装していかないと。

裕希は、美容院とブティックに行く。

だが、不運は重なるもの、行つた美容院に斎北がいたのだ。

「いらっしゃいませーーー」

店員の息の揺つた声。

女性店員が裕希に近づいて、  
「初めての方ですか?」

と、聞いた。

「はー」

「どういった髪型にしたいか、お決まりですか?」

「特には、ただ、今と全然違う髪型にしていいんですが」

そう言つたら、店員は一ヶ所りして、

「かしこまりました、今、担当の者を付けますので」机の席でお

待ち下さい」

と言つて、奥に行つた。

ちゃんとした店だな。

そう広くはないが、だからこそのキチつとしているのか。別に、担当者を付けてくれなくてもいいんだけど、ここに来るのは最初で最後だから。

あれこれ考えていると、担当らしき人が来た。

その人の顔を見たとき、裕希の顔が恐張つた。

「よう、いらっしゃい裕希ちゃん」

「…せん、ぱー」

「びっくりした？　ここはのバイトしてんだ。けど、裕希ちゃん家つてここから遠いよな」

「…たまには」

「そうか、確か今と違う髪だよな、具体的には？」

「…肩まで切つて、前髪からサイドにかけてシャギーを、その後ストレートパーマをかけて下さー」

「シャギーが目立たなくなるけどいいのか？」

「ええ、かまいません」

「わかった。でももつたいないな、伸ばしてたんだろ」

「そういうわけじゃないです、ただ、切る暇がなかつただけです」

本当は…、仕事に行くため変装するのに便利だつたから。

髪は武器の一つだ。

ジャキッ、ジャキッ。

肩より少しづめで、一気に切る。

それからシャキシャキと、軽やかに切られていく。

出来上がるまで、裕希は目をつぶつていていた。

…なんで、こんなときに先輩と逢うんだろうか、一人になりたいと思つてゐるときに。

まるで誰かに仕組まれたみたいだよ。いや、仕組まれたんじゃないむしろ、そう、誰かに踊らされている、そんな感じだ。ここまで

思い通りにならないとそう考えてしまつ。

…こんな状況がずっと続くと、きっと私はどうにかなつてしまつ。気持ちが不安定になつてしまつ。だが、今動くわけにはいかない、日本を発つわけにはいけない、父さんの仇を取らなければ。シリウウもいる……。

……クソッ！ 今にもどうにかなりそうだよつ！

裕希は思わず、髪を切つていることも忘れて、下を向いてしまつた。

「おわつ。 いきなりどりしたんだ」

斎北のびっくりした声が飛んできた。

ハツ！

裕希は我に返つた。

「ア…すいません」

「いや、大丈夫だよ。カットは終わつてるから」

「そうですか、良かつた」

「じゃ、タイマーが終わるまで、ちよつと我慢してな」

「はい」

斎北は、他の人のところに行つた。

「…………」

「ハア…」

まづつた、すっかり忘れて考えこんでしまつた。  
やつぱり、父さんることは禁句だな。

私が私でなくなつてしまつ。

別なことを考えよつ。

私が映画に出ないことは、先輩たちはアイツから聞いただろうか。  
斎北先輩は何も言つてはこない。こんな、無責任なことをしたんだ、  
いくら人の良い先輩たちでも、許すはずがない。

…クス。

それとも、呆れられてしまったかな。  
もしそうなら、…ちょっと悲しいな。

まあ、自分でまた種だから、仕方ないけど。  
ピコンピコンピコン…。

タイマーが切れた音だ。

カチッ、

「はい、お疲れさん。シャンプーするか?」

「はい」

シャンプー台に移動する。

シャー…。

「熱くない?」

「大丈夫です」

ブワアー

髪を乾かしながら整える。

仕上げはムース。

「…こんなんで、どう? 前髪少し軽くしてみたけど」

「…バツチリです」

「だいぶというより、全然イメージ変わったな」「そうじやなければ意味がないんですよ。

よし。

「ありがとうございました」

「いや。また来てな」

お金を払い店を出る。

途中、化粧と着替えをするのにディスコに入る。田立たなくて済むからね。

服装は、チャイナ風のロングドレスに、丈の短いジャケット。化粧もプロ並みに。

…さて…、行きますか。

「……」

見張りは、いない…。

正面からではなくて、裏から入る。

壁があるがそんなもの飛び越えればいい。

最上階に行き、部屋に入る。それでも気は抜けない。

「サリッ。

ベッドに腰を下ろす。

「フウ…。

「…どうするか…」

「…じこも長くいられない。

…早く済まさなければ。一、二日中…。」

「……」

パソコンの前に座る。

しばし考える。

力チツ。

パソコンのスイッチを入れる。

「……北村は後回しだ。まずはシリコウをかたずける  
信号弾はあげられないが、奴の組織コードにメッセージを入れる  
ことはできる。」

メッセージは。

『五丁目、廃屋のビルにて待つ』

名は出さない。奴ならわかるはず。

「さて…、一眠つするか」

ピロロロロ、ピロロロロ。

裕希の家にいる東条院の携帯電話が鳴った。

「…私だ」

『黒木です。その後、裕希さんから…』

「…いや。じこには来ていない。神に学校を張りせていくが来ていい  
いようだ」「…」

『…そうですか、私のところにも来ていません』

「…あそこはどうだ」「…」

『あそこ?』

「隠れ家に使つていた部屋だ。あそこは誰も張らせていない」

『総頭…』

「勘違いするなよ。私がそこまで良い人だと思つか?」

『…そう、でしたね。行きますか?』

「ああ、頼む」

午前一時。

「…」

約二時間くらい寝たな。

それじゃ、行くかな。

服装は…

「……いつか、これで…念のためズボン穿いてくか、やつぱり脇に銃をしまい、足にはナイフを。

サングラスを掛けて。

「行きますか」

バイクで行きたかつたけど、黒木の店に置きっぱなしだから仕方ない、そう遠くないから歩いて行くか。

新しいバイク買わなくちゃな。

裕希が出ていった数分後、黒木が来た。

ガチャガチャ…。

鍵が掛かっている。

いつたん一階に戻り、鍵を借りる。

「すいません。712号室の鍵を貸して下さい」

「あなたは?」

「兄です」

鍵を借りて、部屋に入る。

人の気配は、もちろんない。

ベッドを触る。これは、裕希が来たかを確かめるためだ。

「…」

微かだが、暖かい…。

総頭の言う通り、裕希さんはここに来た。

しかし、いつたい何処へ…私が来ることなど知らないは。ここに長くいられないことはわかつてゐるだらうけど。

…何か、手掛かりはないだらうか。

…パソコン…。

『なんらかの形で、父親のことを…』

ここにパソコンには、フロッピーは入っていない。とすると、

黒木は受話器を取り、総頭にかけた。

ブルルルル、ブルルルル。ガチャ。

「黒木です。総頭のおっしゃつた通り来てたようです。それから裕希さんのパソコンに入つてるフロッピーに、おそらくそこに父親のことが、…はい、私の感ですが。…わかりました、ことどまります」

東条院は一階にあるパソコンの部屋に行く。

「…じれか」

起動させ、中身を見る。

データが出てきた。それを黙つてみている東条院。  
そして、パスワード。

「パスワード、裕希はわかつたようだな

さて、どうしたものか。と、考えるが、悩む必要はない、それようの機械がある。

懐からその機械をだすと、パソコンにつなげ、作動させる。  
ピー、カタ、カタカタカタ。

ピピッ。

パスワードが解け、死因のデータってきた。

それを見た東条院は、

「ふざけたまねを」

と、言つた。

誰のがこのフロッピーを…。

……！

『……台本が盗まれた』  
「……！」  
アイツ、シリウウか。

## 第8章・決闘と正体 -

午前一時三十五分。  
指定した場所に行く。

「…………  
失敗するわけにはいかない。北村を殺るまでは死ねない。  
奴の実力はだいたいわかつていい、実戦しているところを見たこ  
とはないから、ハツキリとしたことはわからないが  
多少の怪我は覚悟しておこう。」

「ずいぶん待つたぞ、カーリー」

頭上から声が響いた。

振り仰ぐと、屋上にシリュウが立っていた。

「待たせたねつ。始めようかつ

ダツ！

懐から銃を取り出しながら走り出す。  
銃を消音にする。

中は真っ暗だ。サングラスをばずす。  
夜目が効くのは私だけではない。

周りを見渡す。

何もない。柱だけ。

「…………隠れる場所は無しか……」

耳を澄ます。

「ジヤリ……

小さい…砂利を踏む音がする。

そう、あちこちに砂利があるのだ。

「…………

ダツ。

二階に向かって一気に走り出す。  
ザツ。タンタンタンツ。

階段を駆け上がったとき、

パンツ！ ビシッ

「……！」

サッ…。

…… アイツ、音消してないのかつ。

……しかし同じ階にいるのなら、微量の気配で探せる。

バッ。

バスツバスツバスツ。

発砲しながら距離を縮めて行く。

ザザツ。

柱の陰に隠れる。

「……」

少し長引くな…。

アイツは本気を出していない。

…… フツ。私もだが、上等じやないか。

裕希の家にいる東条院は黒木に連絡している。

「シリュウのコードの中にはか入つてないか。外部からのメッセージー

ジだ」

『わかりました。お待ちください』

カタカタカタ。

データを引き出している。

『……ありました。五丁目の廃屋ビルにて待つ、と

「それだけか

『はい』

『時間は

『一時六分です』

「わかつた

『пуст…。

「わかつた

『пуст…。

黒木から連絡があつたのが午前一時過ぎ、今午前二時。約一時間前か。

五丁目廐屋

向かおいでしや、玄関を出たとぞ、

校長先生？

卷之三

門のところに立つて、さかだてていた

三九

名鳥おせうてく 神君ごんとは誰か一緒にいた

福井の川の橋で、水深が一丈二尺

「アーリー・エイジ」の言葉は、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、主に英米で使われた言葉で、その意味は「古風な」や「原始的な」などを指す。

「ニイハノミツタツ」

「父親」二女の言ひ

「」

「分かつた。伝えておく」

ペ  
二  
り

あや子は、お辞儀をして帰つていつた。

東条院は急いで廃屋ビルに向かつた。

八  
九

あちこち傷だらけだ。

カーリー。さすがだな、噂以上だ。

足音かしにれは危なかつたかもしれなし

しかし、これ以上の持久戦は危険が

シリウ、なかなかやるじやないか。

裕希も傷だらけだ。

ここまで手こするなんて初めてだ。

しかし… チヤラ…、

残りの弾を取り出す。

残り三発か…。

これで決めなければ。

ス…、

ダッ！

シリュウに向かつて走り出す。

「……！」

真つ正面から来るとは、…もうつた。

パーンッ。

スッ。

寸前のところで避ける。

パーンッ

一発。

バツ！

パスッ。

横に飛びながら撃つ。

ビシッ。

「くっ……」

シリュウの足にあたった。

パーンッ。

三発。

もう片方の足ももひつ。

バスッ。

「ウッ」

ガクリ…。

シリュウが座り込む。

とどめをさそとと、立ち上がったとき、

「カーリーッ！」

「……つ！」

その声に一瞬隙ができたとき、

パンツ！

「……つ」

シリュウの放った凶弾が裕希に命中した。

「カーリーッ！」

「……くつ……」

パスッ。

銃弾は肩に命中していたが、何とか打つ力はあった  
弾はシリュウの眉間に命中した。シリュウは死んだ。

「……つつ」

ガクンッ。

裕希が倒れる。

「カーリーッ」

東条院が駆け寄る。

裕希を抱き起こす。

「しつかりしろっ」

「……しつかり……しきだと、いつたい誰のせい……、

東条院の言葉に、怒りが込み上げてくる。そのせいで意識がハツ  
キリした。

「……なぜ……キサマがここにいる」

「喋るな。……運がいいな、あんな至近距離で急所ははずれている」「  
そう言いながら、止血をする。

ギュッ。

「つっ……。運……だつて、そんなもの、あれが奴の実力なのだ」  
「いてて、やつぱり、しばらく撃たれてないから免疫がなくなつ  
てるな。氣イ失つたほうが楽なんだが、どこに連れていかれるかわ  
かつたもんじやない。」

しかし…

「喋るなと言つていい。今、車を……カーリー？」

「……」

不本意だが、東条院の腕の中で氣を失つた。

次に目を覚ましたときは、自分の家のベッドの上だつた。

「総頭、裕希さんの様子は」

「まだ、目覚めていない」

午前十時三十分。

裕希の家には黒木と東条院が話をしている。あのあと、東条院は黒木に連絡をし、榊たちを解散させた。

「なぜ裕希さんは、いきなりこんなことをしたのでしょうか？」

「仇、だな。父親を殺した」

「仇？ フン。そんなんじやないよ」

一人の会話に、突然裕希の声が割り込んだ。

「裕希さんっ」

「目が覚めたのか。気分はどうだ」

「いいと思つたか？」

そう言いながら、キッチンへ向かつ。コーヒーを煎れる。

それを見た黒木が、

「傷が塞がつていないんです。そんな濃いものを飲んでは」と言つた。

だが、裕希は気にしない。

「コーヒーを手に、椅子に座ると言つた。

「言つておぐが、父親の仇だからといってアイツを殺したんじやないよ。私は売られた喧嘩は買う主義なんですね」

「コーヒーを一口飲む。

「では、仇は討たないというんだな」

「シン……。

「コーヒーを置く。

「……なぜ私にかまう。頼まれたほかに何があるのか？ 必要以上

に関わる何かが。言つてもらおうか」

そう言つて向けた田は、裕希ではなく、カーリーの田そのものだつた。

その目を見た東条院は、

「……わかつた、実は、君の父親から自分の仇を取らせないでくれと頼まれたんだ」

「それでずつと、黒木に見張らせていたわけか」

「そうだ」

「……お前たちが私にかまう理由はわかつた。だが、さつき言つた通りだ、私は喧嘩を買つたんだ、お前たちにとやかく言われるいわれはない。たまたま父親を殺した奴と重なつただけだ」

ぐい。

「コーヒーを一気に飲み干す。

「では……、どうしても北村を殺すと？」

「愚問だな」

「……わかつた」

「カタリ……。

席を立つ。

「黒木、帰るぞ」

そう言つて、東条院は出ていった。

「はい……」

黒木は、裕希のほうを見て言つた。

そんな黒木に裕希は、

「何だ、わからないのか？ この時点で私とお前たちは切れたのだ。わかつたらさつさと帰るんだね」

「……」

キイ……、パタン。

バタン。ブロロロロ……

走り去る車の音。

「……」

ガターンッ。  
ギュッ。

いつ……つ。

左胸を押さえつけずくまる。

「……けほ……」

ケホケホ……

熱……、出てきたかな。

……弾は、急所すれすれのところでははずれていた。

「足を撃つて正解だつた……」

けほつ。

……寝よ……。

「ソファーでいいか

ドサリ。

居間に行つて、ソファーに横たわる。

「……」「……」

一スウ。

眠りに落ちた。

午後二時過ぎ

あや子・富内・斎北・水野の四人は、裕希の家に向かっていた。

「裕希ちゃん、帰つてきてるかしら」

「どうかな。昨日、貢が裕希ちゃんに会つたのが、夜の七時半位なんだろう?」

「ああ」

「その時、変わった様子はなかつたのかい?」

聖が聞いた。聖も、私服で来ていたことが気になつていて。

「いや、何か考え込んではいたけどな」

「そう、何か思い詰めていなければいいのだけれど

話していると、裕希の家に着いた。

ピンポーン、ピンポーン。

インター ホンを鳴らす。

ピンポーン…。

「……」

「誰だ…。

ピンポーン。

はいはい。人がせつかく寝ているのに…。  
イヤイヤ起き上がり、インター ホンを取る。

「……はい。どちら様…」

「裕希ちゃん? 良かつた。あや子よ」

「……」

あや子、さん…?

「裕希ちゃん? みんなも来てるのよ  
み・ん・な…?」

「……ちよつと待つててください」

がちゅ。

インター ホンを置くと、一階にあがった。  
まったく。

「ホンシトにタイミング悪いなつ  
いいかげん腹が立つてきた。」

黒のシャツに着替えて降りる。

力チャリ。

玄関の扉を開ける。

「散らかってますけど。どうぞ入つてください」

あや子たちを中に入れる。

「今お茶煎りますね。座つてください」

「ああ」

力チャヤ。

コーヒーをおぐ。

裕希は、椅子をもつてきて座ると、話を切り出した。

「どうしたんです四人そろって、珍しいですね  
「裕希ちゃん、何か…悩み事でもあるの?」

あや子が言った。

「いいえ、無いですけど」

「本当?」

「はい」

「ならここだけ。実は私、裕希ちゃんが心配で昨日の夜来たの。  
でも、裕希ちゃんはいないって言われて」

「…言られて?」

「誰かいたんですか?」

「ええ、校長先生がいたわ。なんでも先生も裕希ちゃんを待つてた  
つて、裕希ちゃんのお父さんの親友なんですか?」

「はい」

東条院が家に、中に入っていたな 何もいじつてないだろ? な。  
あとで確かめよう。

「…裕希ちゃん」

今度は、室内がしゃべり出した。

まつ、予想はつく。

「はい」

「映画のことだけじ、どうしてこきなりやめるなんて言つたんだい。  
しかも、自分でなく神先生に頼むなんて。理由を聞かせてくれな  
いか」

「俺も聞きたい」

斎北が言った。

…理由 、どう言おつか

「」の際、本当のことと言つた方が、スッキリするかな。本当はま  
ずいんだが、まつ、どのみち言わなかつたとしても、」を離れる

んだ、かまわんか。

「神先生とは、ちょっとした知り合いで頼んだんですよ、実は  
ちょっと今手を放せない仕事がありまして、それに、あの映画はま

「すいんです」

「仕事？ バイトかなにか」

「いえ。学生は副業で、そつちが本業なんです」

怪訝な顔をする四人。

「どんな仕事？」

水野が言った。

「…アサシン」

「え？」

「アサシンなんて聞こえはいいけど、簡単に言えれば、よつは殺し屋なんですよ私」

「…」

あはははは。

「…」

いきなり笑いだす四人。

フウ。

信じてないな。

裕希は溜息をつく。

まあ、いいけどね。べつに。

「わかつたよ、そこまで言いたくない理由なら、無理に聞かない」

宮内が言った。

「…はあ…」

「でも、思ったより元気そうなんですよかつたよ」

そう言って、席を立った。

「帰るんですか」

「ああ、例の如く、依頼が待ってるんですね」

「そうですか、頑張つてください」

四人を、玄関まで送る。

「それじゃあ

「はい」

三人出て行って、斎北が振り向いた。

「なにか」

「本当なのか」

「信じてくれるんですか?」

「……どっちが、本当の君なんだ。あの時泣いた涙は、本当だよな……、ああそuds、西岡さんに言つといてください、あのとき私に渡したパスワード、偶然とはいえ、あれは危険ですからと」

裕希は、笑つて言つた。

「……わかつた。じゃあな」

斎北たちは帰つて行つた。

「……」「……」

クラッ。

一ツ!

ガターンッ。

「……」「……」

いて、肘ぶつけた。

だいぶきてるな。今までの疲れが一気に出たか。熱もだいぶ上がつてるみたいだ。

しかし、今ここで寝込むわけにはいかない。

解熱剤飲んどくか。

ふらつく体を支えながら、キッチンに行き飲む。

コクコクコク。

ハアー。

これで熱はひぐだう。

力タ……。

椅子に腰かける。

「……」「……」

言つたら楽になつた。

笑い飛ばされてしまつたけど、斎北さんは、信じてくれたみたいだけど、べつに、信じてもらわなくともいいけど

……どっちが本当の、か……

「どうせ、私なんだけどな……」  
皿をつぶると、眠りに落ちていった。

## 第9章・別れ

- 裏国総本部

東条院の部屋。

「総頭、ほんとに裕希さんと切るおつもりですか」

「……」

東条院は応えない。

「江藤様との約束は、どうなするつもりですか」

「……洋一との約束は守る」

「では」

「ただし、生活費の工面だけだ」

「え。それでは、仇をという約束は」

「彼女も言つたであらう、今回のこととは仇ではないと」

「しかし」

「黒木、情を入れすぎだぞ。少し頭を冷やせ」

「……わかりました」

黒木は部屋から出ていく。

「……」

総頭のおつしゅることはよくわかる。だが、裕希さんにもしものことがあつたら、約束は守れないんですよ。そのことは貴方もわかっているはずです。総頭。

裕希さんは、死ぬことなんて何とも思つていらないんです。むしろ……、死にたがつていてるんです。今まで江藤様が、父親が生きていると信じていたから生きていたんです。ですが、父親がいない今は。

だからこそ、我々が歯止めにならなければならぬはず。

「総頭、そうではないのですか？」

「まだ、何か隠してらつしゃいますね。」

裕希さんの傷の具合が気になりますので見に行きます。

途中、神とすれ違ひ。

コンコン。

神が扉をノックする。

『誰だ』

「私です」

『入れ』

プシュウッ。

東条院が言つたと同時に、扉が開いた。

「失礼します」

「…北村の様子は」

「今のところ変わつた様子はありません」

「北村から口を離すな。シリュウが殺されたことを知るはずだ。奴もそう馬鹿ではない、次に殺されるのは誰かわかるはずだ」「わかりました。隨時、報告いたします。失礼します」

プシュウ。

神は部屋から出て行つた。

東条院は、椅子に座つたまま窓側に向きを変えた。

「…」

洋一…、これで良かつたのか…

『…洋一、なぜ本人に理由を聞かない？ 家に帰つていないそういうではないか』

『秀之、俺は怖いんだよ』

『怖い？』

『ああ、あの子の顔を見るのが怖い。自分がアサシンだと、父親に知られたとわかつたら、あの子はきっと、私の前から姿を消してしまう。それが怖いんだ』

『洋一』

『…秀之、頼みがあるんだ』

『なんだ』

『もし、俺の身に何があったら、あの子を頼む。仇だけは討たせないでくれ』

『わかつた』

『ありがとう。あともう一つ俺の我が儘を聞いてくれ』

『なんだ?』

『なぜアサシンなどになつたのか、アサシンになる者達の理由を知つてゐるだけに、わからないんだ。私は：あの子を死なせたくない…。秀之、あの子を死なせないでくれ。でも、あの子のしたいようによさせてくれ』

「…洋一」

お前が死んでから、まだ一ヵ月しか経つていらないんだな。まるで何年も前のことと思える。

洋一。

「このまでは娘は死んでしまつた」

東条院は空を仰ぎ洋一に言つた。

黒木は裕希の家に来ている。

ピンポーン、ピンポーン…。

「…」

さつきから何度も押しているが、返事がない。

出かけたのか……？

いや、あの傷で出かけられるわけがない。

あの人のことだ、出るのが面倒なかもしれない。

そう思い黒木は、玄関まで行く。

ノックをする前にドアノブを一応引いてみた。すると、

「…っ！」

カチヤ…。

扉が開いた。

「…」

そうつと中へ入つていく。

「…裕希さん？」

リビングにはいないので、キッチンの方へ行くと、テーブルの上に伏せつてゐる、裕希の姿が目に入る。

近くにより様子を見る。

裕希は、ぴくりとも動かない。

スウ…、ス…

熟睡しているようだ。人が入つてきたことに気づかぬほど。まあ、不穏な気配じやないからというのもあるが。

そつと裕希の額に触る。

…熱が…少し高い。

「…じや良くないな」

下がるのも下がらない。

…カタン。

黒木は、そつと裕希を抱き上げ、二階へ運んだ。

裕希をベッドに寝かしたあと、下へ降りる。すると、リビングのテーブルの上にコーヒーカップが五つ置いてあつた。

誰か来たのか、五つのうち一つは裕希さんのだらう。あの人はまたコーヒーを飲んだのか、あと四つは 四にあてはまるものは、ああ、あの探偵部の人たちか。

あの人達とはどう決着をつけるのだろうか、あとで聞いてみよう。

黒木が来てから一時間後。

午後七時半過ぎ。

フツと、裕希は目を覚ました。

「…

ここは、自分の部屋…か。  
自分の…。

「…！」

ガバッ。

飛び起きる。

自分の部屋だつて？

たしかキッチンで眠つてしまつたはずだ。

誰かがここまで運んだ？

「……」

考えられるのは一人、こんなことをする奴はアイツしかいないだろ？。まったく。

そつと、ベッドから降りる。

薬が効いたのか、熱はほとんど下がった。

パソコンのほうへ行く。

東条院が来ていた……

何もしていないうけど、一応大事なやつは持つているが。そう思いながら周りを見る。

すると、何がが無いのに気づく。

「……、シリウガ置いていったフロッピーが無い……」見たのか？……、東条院はあれを見たんだ。パスワードの部分も。そして持ち帰つた。

フウ……。

「コピーでも取つとくんだったな」

さて、アイツの顔を拌みに下に降りるか。

トントントントントン……。

リビングに行くと、そいつがいた。

そいつは、銃の手入れをしていた。

ハアー。

ため息をつく。

「黒木、何をしているんだ。そんなもんリビングでやらんしてくれ、しかも人の物まで」

「裕希さん、熱はどうです？」

裕希の言つたことなど全然氣にしてない様子。

「ああ……ほんと下がつたよ、薬飲んだからね

「それは良かつた」

黒木は、少し笑つて言つたあと、また、手入れし始める。呆れて見る裕希は、額に手をあて言つた。

「黒木、なぜ戻ってきた。お前たちとは切つたと言つたであら？」

黒木は手を止めた。

「……總頭は、貴女を死なせない、仇は取らせないと書いておきながら、貴女と手を切つた。その理由がわからないんです。なぜ今になつて」

「そんなの簡単なことだ。父さんとの約束を、あれほどまことに守る奴だ。だつたら答えは一つ、最後にもう一つ、頼まれたことがあるんだろ？」

「どんな……」

「さてな、まあ、大体予想つくけどね」

「……」

黒木は黙つてしまつた。

裕希は黒木に冷たく言つ。

「悩む必要はない、貴方には関係の無いこと。早く帰るんだね、店も、休んでられないだろ？」

言い終わると同時に、一階に着替えに行く。

今度は、ちゃんと調べてから行かなければ、面が割れているからまた変装しないと。このチャイナドレスは、血でダメになつたから何を着るかな。

クローゼットの中を覗く。

うーん。

ああそうだ。バイクを買わなきやならないから、やはりパンツルックだな。

そうすると、ジーパンか。まともな格好でバイクは目立つからな。黒のジーパンに、黒のTシャツ・ジージャンでいいな。この格好していけばいいだろ、ちょうど胸の包帯も絞めるし。着替え終わり、偽造カメラ（これはウォーキマンを改造したもの）

を出す。

ナイフは靴に仕込んであるからいいとして、銃はどうあるかな、左肩は無理だし 右肩に掛けるか。

銃を右脇にします。

髪は濡れた感じにする。

サングラスをかけ、下に降りる。

黒木は…、いた。

玄関に立っていた。

「出るんだつたら出て」

「一つだけ、聞いてもいいですか」

「……なに?」

靴を履きながら応える。

「の人たち、探偵部の人たちはどうするんです?」

「ああ、そのことなら平気」

ガチャツ。

玄関から出る。

カチツ。

鍵を閉める。

歩きながら話す。

「平気?」

「ああ。バラした」

「……!」

黒木はギョツとする。

信じられない顔をする。

裕希はクスッと笑つた。

「信じてないみたいだつたけど。 なんたつて、笑い飛ばされてしまつたからな」

笑っている裕希を見て黒木は、「なぜ平氣でいられるんです。 もしかしたら信いてない振りかもしないんですよ」

と言つた。

「……いや、あれは本当に信じてない。ああでも、一人だけいたな」「誰です？」

「斎北さんだ。どっちが本当の私なんだと言われたよ、信じる信じないは関係ないんだ、言つても言わなくても、どっちにしろここを離れるんだからな。だったらスッキリしてから行こうと思つてな」

「……どこへ」

「さあね、まだ決めてない。さて、これで本当のお別れだ、一度と家に来るんじゃないよ、アイツがいい顔しないだろ。それと、アイツにこゝれ渡しどうしてくれ」

そう言つて出したのは、退学届だった。

「一応出さなければならぬからな。それじゃあね」

黒木に背を向け、歩き出した。

その後ろ姿を見つめ黒木は叫んだ。

「裕希さんっ、死なないでくださいつーーーと。」

もうひとりこの声は、裕希に届いた。

「……さあね」

裕希は、ポツリ、そう呟いた。

黒木は、結希の姿が見えなくなるまでそこここいた。

## 第10章・決着・

近くのバイクショップで質づ。

「いらっしゃいませ、どんなものをお求めですか？」

男の店員が聞いてきた。

「うーん、音が静かなあります？」

「種類は」

「四百」

「え、四百。ですが、お客様には大きすぎるかと」

店員は驚いたように言つ。

前のバイク買つたときも言われたな。

「大丈夫。前のもそうだったから」

「そうですか。…では色は」

本当なら赤が好きなんだけど、田立つから、  
「黒で」

「かしこまりました。そうしますと、この型がよろしいかと」

そう言つて、パンフレットを見せてくれた。

その中に、前のやつと同じ型の物があった。

「…この中で、一番動きやすいのは」

「えーと、これですね」

店員が指したのは左から二番目のバイクだった。  
良かつた、同じ型じゃなくて。

「わかりました。これを下さい。いくらですか」

「ありがとうございます。しばらくお待ち下さい」

店員は奥に行つた。

裕希は時計を見る。

- 8時20分か。

このあとアジトに行って、北村のことを調べあげると夜中になつてしまつた。

奴が一人なら簡単なんだが、そうもいかないだろ？シリュウが死んだことを聞いてるはずだ、居所を変えただろう。実行するのは夜中だ。

しかし、今夜は無理だな、勇み足過ぎると良くないしな。

明日…、だな。

店員が戻ってきた。

「お待たせしました。132万4千円になります。お支払い方法は「カードでお願いします。一括払いでいいです」

店員にカードを渡す。

そんな裕希に、店員は目を丸くする。

あたりまえだ、普通ローンで買うのが一般的で一括払いなんてめつたにいない。

店員は、カードを受け取り裕希の横で作業をする。

「……」

不正がないようにか。  
ピリピリピリ。

領収書を切る。その領収書と一緒にカードを返す。  
「では、必ず口座をお確かめ下さい。ありがとうございました」  
バイクに乗り、走り出す。  
「ありがとうございました」

アジトに向かう途中、ガソリンを入れる。  
確かに、乗り心地はいいな。

午後九時十一分。

アジトに着く。

フウー

バイクをおいて、エレベーターに乗ろうとしたとき、管理人さんに呼び止められる。

「ちょっとカリさん」

「はい」

カリとこう名で借りている。

「昨日の夜、貴女のお兄さんがいらしたわよ」

「え？」

お兄さん？

「カツコトイイお兄さんね」

「はあ、どうも」

私に兄はいなこや。きっと黒木だな。

まつたく、よくやるよ。

部屋に戻り、とりあえず上着を脱いだ、包帯を取り替える。傷口を見つめる。

「……」

「こんな怪我をえなければ、とっくに奴を殺せたのに。アイシヤア  
邪魔しなければ、…くわつ。

…フウ。

「どうちてしても明日だな」

奴の居場、自分の足で搜さなきや。

ブウォンッ。

翌朝といつても午前十一時半

行動に移す。

「…まさかこの私自ら、聞き込みするとは前代未聞だ  
まつ、最後だから我慢するが。

今日の服装は、黒のスーツに白のチャイナ風のシャツ、そして黒のジャケット、ファスナー式のね。でなきや銃が見えてしまつからね。

化粧はしてゐ、せひひとサングラスも忘れずに。

「すいません。ちょっとお聞きしたいんですけど」

以前住んでいた周辺で聞き込みを開始する。

「なにかしら？」

斜め向かいの住人らしき女人に聞く。

「そこに住んでた北村さんなんですか、引っ越ししたんですか？」

「さあ、でもここ最近見ていないわねえ」

おばさんが首を傾げていると、

「美土里町じやない？」

と、別の人気がきた。

「あなた知ってるの？」

「ええ、たしか美土里町にある別荘に行くつて、知り合いらしき人たちが話してゐるのを、聞いたのよ」

「ずいぶん遠くに行つたのねえ」

美土里町。

「そうですか、ありがとうございました」

「いいええ」

裕希はお辞儀をしてバイクに戻る。

美土里町にいるのか。

美土里町は、ここから十キロぐらい離れた町だ。

別荘とか言ってたな、たぶん登録はしていないんだろう。

登録してあれば一発でバレるからな。

さて、と、奴の居場所もわかつたことだし、お昼でも食べに行く

か。

ブオーン。走り出す。

美土里町まで、一時間ちょっとで行ける。

裕希が昼ご飯を食べているとき、探偵部の四人は、顧問から裕希が退学したことを聞かされていた。

「先生、どういうことなんですか。退学は、取り消しになつたんじゃないんですか？」

あや子が言う。

「一度はそうなつたんだがな。実は私も良くわからないんだ。校長

が受理したそうなんだが

「校長先生が？」

「ああ」

「今日は来ますか？」

斎北が聞く。

「あ、ああ、つてこらお前たち、どこに行くな！」

顧問がしゃべ終わる前に、四人は校長室に向かって走り出していた。

「話聞いてもらえると思つか」

走りながら富内が聞く。

「無理にでも聞いてもらひわ」

斎北が応える。

校長室前。

コンコン。

ガチャヤ。

「失礼します」

あや子が一番に入れる。

つづいて富内、斎北、水野とつづく。

「何かね。何かあつたのかい」

東条院は表情一つ変えずに言った。

「突然申しわけありません。私は三年A組の富内健悟です」

「C組の斎北貢です」

「F組の水野聖です」

「E組の名倉あや子です」

次々と挨拶をしていく。

そして東条院も、

「私が、校長代理の東条院だ」

富内が切り出す。

「单刀直入にお聞きします。今更なぜ、江藤裕希さんの退学を受理なさったんですか？」

「なぜつて、君たちに関係あるのかな」

「部の後輩です」

「部は辞めたと聞いたが、違うのか?」

「……いえ、本当です」

「だつたら関係ないんじやないのかな」

東条院の言つていることは当たつている。

「……校長先生は、裕希さんの知り合いなんですよね」

あや子が話し出す。

「そうだか」

「親友の娘が学校を辞めるんですよ、平氣なんですか?」

「いくら親友の娘だからとはいえ、本人が望んだことだ。私にはどうすることもできないんだよ」

「だつたらせめて、理由を教えてくれませんか」

「……今頃それを聞くのかね? 君たちは知つてはいるはずだ、それに、本人から聞いているはずだが」

東条院は知つていていた。裕希が自分の正体を話したことを、黒木から聞いたのだ。

「……え、聞いてません、けど」

あや子が言った。

スイツ…。

斎北が前に出る。

「校長、貴方は知つていたんですか」

「貢?」

あや子が怪訝な顔で言う。

富内と水野は黙つて見ている。

「だとしたら?」

「辞めさせようとは、思わなかつたんですか?」

「思わないね。彼女が好きでやつてることだ」

「死んでも? 平氣なんですか?」

「えつ。ちょっと何言つてるの? 裕希ちゃんが死ぬですつて?」

どういうこと?」

斎北があや子がつめよる。

「IJの間、裕希ちゃんが俺たちに言つたことは本当のことだ」

「……そんな」

愕然とするあや子。

「……彼女にとって、君たちは危険な存在だ」

「どういう意味ですか」

「そのままの意味だ」

コンコンッ。

途中、誰かが来た。

ガチャヤ。

「……あ、お話中でしたか」

「かまわん、この者たちは知つている」

「はい」

入ってきたのは、榊だった。

「榊、先生?」

四人とも、驚いている。

「報告いたします。北村は昨日、美土里町に引っ越しました。この他に変わった様子はありません」

「家には」

「はい、一歩も出でていよいよです」

クツ。

東条院が笑う。

「馬鹿な奴だ。おそらく裕希はもう、居場所を突き止めているだろ

う」「おそらくは。あの方なら簡単でしょう」

東条院と榊、二人の会話に茫然と聞いている四人。

「下がつていい」

「失礼いたします」

ガチャヤ。

パターン。

榎は戻つていつた。

「榎は、私の部下なんだよ」

「部下？ いつたい貴方は」

「さて、裕希のことだが、彼女のことは忘れてくれないか」

「そんな…」

シクシク…。

あや子が泣いている。

ガチャ…。

富内がそつと促す。

「俺は、忘れる事はできません」

「……」

「殺し屋が、本当の彼女だとは思いません。何か、理由があるんだ  
と思います」

じつと斎北を見る東条院。

「知りませんか」

「いや、私も知らない。これは本当だ」

美土里町。

裕希は北村の家の近くの喫茶店にいる。  
その喫茶店からは北村の家が見える。  
軽い昼食をとりながら、じつと様子を見る。  
近所の人との話だと、家にいるようだ。  
午後一時をまわったところだ。

カチヤン…。

コーヒーを置く。

「……」

どうするか、夜まで時間がありすぎる。

…事を、早めるか。

とすると、どうやって中に入るか。

「…………」

力タ…。

席を立ち、トイレに行く。  
パターン…。

バックから携帯を取り出し、北村の家にかけた。

プ、プルルルル・プルルルル

ガチャツ。

『もしもし』

男の声。

「私、裏国の方ですが、北村様でいらっしゃいますか？」

『ああ、そうだが何か』

「はい。総頭、東条院様から貴方様にお渡しするよう頼まれたものがござります。近くまで来ているのですが、そちらへお伺いしてもよろしいでしょうか」

『分かつた。鍵は開けとくから勝手に入つて、置いていってくれ  
「かしこまりました』

ブツ。

電源を切る。

フツ。

裕希が笑う。

馬鹿な奴だ。

頼まれた物などあるわけがない。

あるといえば、鉛玉をくれてやるぐらいだ。

「行くか」

『ありがとうございました』

喫茶店を出て、北村の家に向かった。

北村の家の周りには、木々が茂っている。

ガチャツ。

玄関を開け中に入る。

「失礼いたします」

と言いながら周辺を見渡す。

シンとしているが人の気配はする。

「二階……か。

キイ……、パタン。

出た振りをする。と同じに気配を消す。

懐から銃を出しながら、二階へ上がりしていく。

ボディガード達はいらないらしい、一つの気配しかしない。

気配のするほうへ行く。

扉が閉まっている。

息を整えてドアノブに手をあて、そつと開ける。

スー……。

椅子に座っている姿が、目に入った。

銃口を向け、

「……北村英夫だな、こっちを向いてもらおうか

「！だれ、だ」

電話の声と同じ。

本人か。

「シリュウを知ってるか？」

バツ！

奴が振り向く。

「おまえはっ！」

ビクツ！

銃を向けられていることにビクつく。

「お前え、は、カーリー……」

くす。

「はじめまして、北村英夫さん？」

「どう……して、ここ、が

声が、震えている。

ニッ……。

そんな奴の姿を見て笑う。

それは余計に恐怖心をかきたたせる。

「た…、助けてくれ。何でもする。命だけは、金ならこぐらでもやる。な？」

「……」

こんな小さい男なのか、こんな男に、父さんは殺されたのか。裕希の胸の中に、失望感がよぎる。

チキ…。

撃鉄を引く。

「！ まつ、まつてくれっ！」

「……」

こんな奴につ！

グツッ！

引き金を引いた。

「…つ」

ドタツ…

男が倒れる。

銃弾は、奴の眉間に命中した。

北村は死んだ…。

なんという呆気なさだ…。

その場に立ちつくす裕希。

裕希の中に、ある感情があがつていった。それは、失望感ではなく、無力感に近いものだった。

「…ほた…」

涙が頬をつたう。

頭を伏せる。

「…まだ、まだ泣くな」

部屋を出、家を出る。

バイクのところへ行く。

携帯電話を出し、東条院の携帯にかける。

その間も涙があふれる。

プルルルル・プルルルル。

ピッ・ピロロロロ・ピロロロロ。

東条院の携帯が鳴る。

「ちょっとすまない」

ピッ。

「はい……誰だ？」

『……私だ』

「！ 裕希つ」

東条院の言葉に斎北がかけ寄る。

『……仕事は済んだ、……後始末は頼んだよ』

『……わかった。今どこにいる』

「裕希？」

ピツツ。

切れる。

プー、プー、プー。

「」

裕希…。

「校長？」

斎北が聞く。

「切れたよ」

「え…」

「一度と…彼女に会えないかもな  
「そんな」

途中で、電話を切った裕希。

ギュッと、手を握る。

涙が止まらない。

うつ…。

「父…さん、父さん、なんで…、なんで私、生きてんのかな…。

「ねえ、なんでかな」

「もつ…、生きてる意味、無くなつたのに。」

「…」これから…

「……………」

この後、裕希は姿を消した。

生きているのか死んでいるのか、それは誰にもわからない…。

ただ、誰もが願っていた、生きている」ことを。

- - - 2年後 - - -

裏国総本部、東条院の部屋。

「總頭つ

「なんだ」

「カーリーを見付けたという報告がつ

「！ どこだ」

「アメリカ・ニューヨークですっ！」

- E  
N  
D -

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4484d/>

---

ASASHIN

2010年10月8日14時49分発行